

明日香村発掘調査報告会 2017



飛鳥寺西方遺跡航空写真(南西から)

平成30年3月4日(日) 午後1時～

明日香村中央公民館 ホール

明日香村教育委員会

プログラム

- 13 : 00 あいさつ 明日香村教育委員会 教育長 田中 祐二
- 13 : 05 調査報告
「飛鳥寺西方遺跡の調査」 長谷川 透
(明日香村教育委員会 文化財課 主任技師)
- 13 : 55 「小山田遺跡の調査」 鈴木 一議
(奈良県立橿原考古学研究所 調査課 主任研究員)
- 14 : 45 休 憩
- 15 : 00 記念講演
「舒明天皇の時代と小山田古墳」 木下 正史 先生
(明日香村文化財顧問・東京学芸大学名誉教授)
- 16 : 00 終演予定

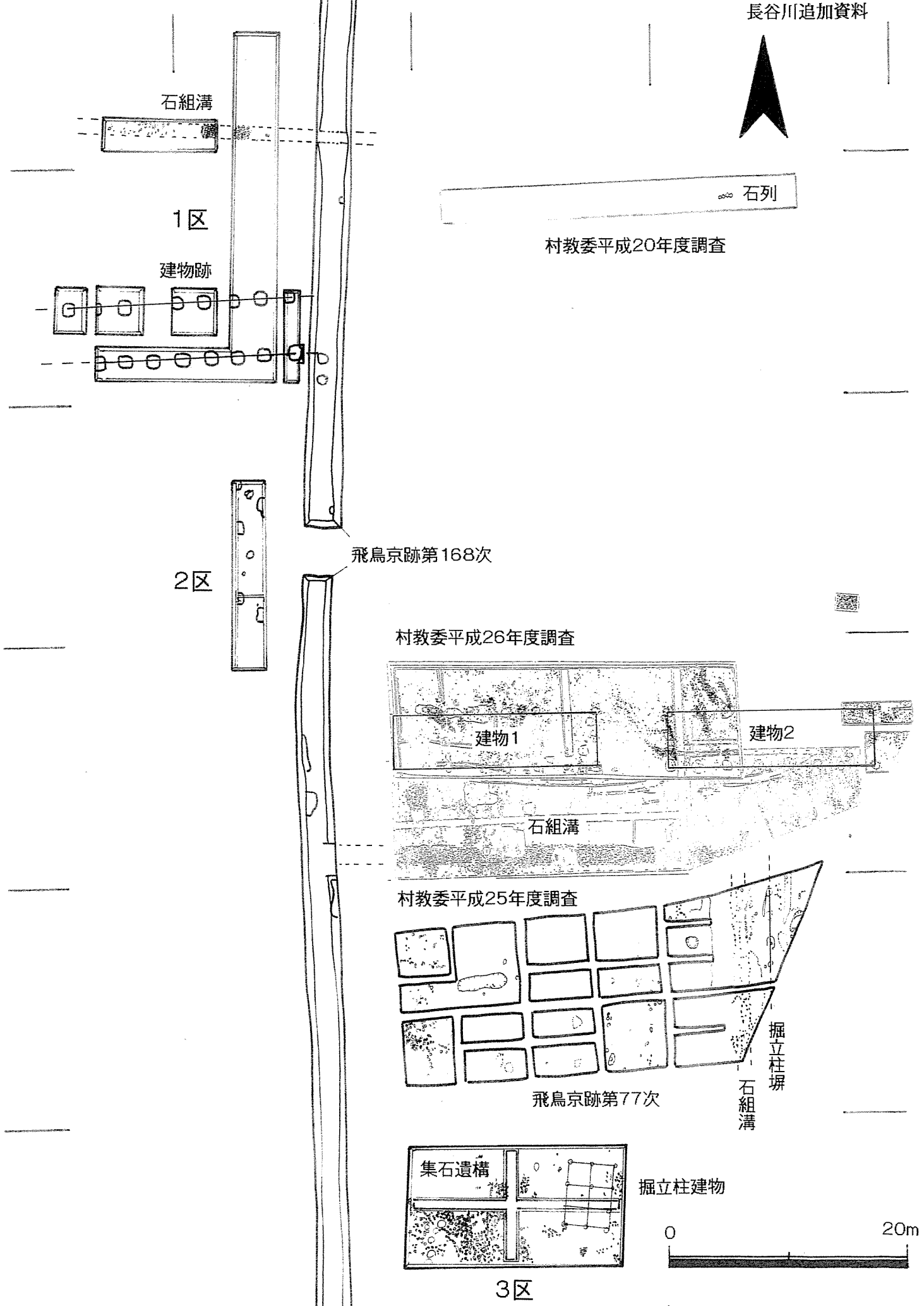
【中央公民館バス停「赤かめ」周遊バス時刻表】

橿原神宮前駅 方面	13 : 51	14 : 51	15 : 51	16 : 51
飛 鳥 駅 方面	14 : 10	15 : 10	16 : 10	17 : 10



飛鳥周辺地域遺跡分布図

1. 牽牛子塚古墳 2. 越塚御門古墳 3. 真弓鏡子塚古墳 4. 小谷古墳 5. 益田岩船 6. 沼山古墳 7. 与楽古墳群 8. 岩屋山古墳 9. スズ1号墳 10. スズ2号墳 11. カツヤマヤ古墳
12. 真弓ミツツ古墳 13. 真弓テラノメ古墳 14. マルコ山古墳 15. 佐田遺跡群 16. 東明神古墳 17. 佐田2号墳 18. 佐田1号墳 19. 出口山古墳 20. 森カシタニ遺跡 21. 森カシタニ塚古墳
22. 向山1号墳 23. 薩摩遺跡 24. 松山香谷古墳 25. 清水谷古墳 26. ホラント遺跡 27. 阿部山遺跡群 28. 稲村山古墳 29. 観覚寺遺跡 30. キトラ古墳 31. 阿部山廃寺 32. 具原寺跡
33. 権隈門田遺跡 34. 権隈大田遺跡 35. 権隈寺跡 36. 坂ノ山古墳群 37. 権前上山遺跡 38. 御園テシアイ遺跡・御園アリイ遺跡 39. 塚穴古墳 40. 高松塚古墳 41. 火操山古墳
42. 中尾山古墳 43. 平田キタガワ古墳 44. 梅山古墳 45. カナツカ古墳 46. 鬼の廻・雪隠古墳 47. 野口王墓古墳 48. 川原下ノ茶屋遺跡 49. 亀石 50. 西橋遺跡 51. 定林寺跡 52. 富浦池古墳
53. 五条野宮ヶ原1号墳・2号墳 54. 五条野向イ古墳 55. 五条野城船古墳 56. 五条野内垣内古墳 57. 榎山古墳 58. 五条野丸山古墳 59. 軽寺跡 60. 石川精舎 61. 盩原遺跡
62. 田中庵寺 63. 和田庵寺 64. 雷丘北方遺跡 65. 大官大寺跡 66. カセヤ塚古墳 67. 庚申塚古墳 68. 山田寺跡 69. 上の井出遺跡 70. 奥山久米寺跡 71. 奥山リウケ遺跡 72. 雷丘東方遺跡
73. 雷丘 74. 豊浦寺跡 75. 石神遺跡 76. 飛鳥水落遺跡 77. 飛鳥寺西方遺跡 78. 飛鳥寺跡 79. 飛鳥東垣内遺跡 80. 竹田遺跡 81. 小原シウロ遺跡 82. 八釣・東山古墳群
83. 東山マキド遺跡 84. 金鳥塚古墳 85. 飛鳥池工房遺跡 86. 酒船石遺跡 87. 飛鳥京跡 88. 飛鳥京跡死池 89. 甘藷丘東麓遺跡 90. 川原寺墓山遺跡 91. 川原寺跡 92. 橋寺跡
93. 東橋遺跡 94. 鳥庄遺跡 95. 石舞台1〜4号墳 96. 石舞台古墳 97. 馬場頭古墳群 98. 打上古墳 99. 都塚古墳 100. 戒成組田古墳 101. 坂田寺跡 102. 飛鳥稻淵宮殿跡 103. 塚本古墳
104. 朝風廃寺 105. 稲淵ムカタ遺跡



遺構平面図(S = 1/400)

飛鳥寺西方遺跡の調査

長谷川 透
(明日香村教育委員会)

1. はじめに

飛鳥寺西方遺跡は、飛鳥寺西門の西側を南北約 200m、東西約 200mにわたって広がる飛鳥時代の遺跡である。この範囲確認調査は飛鳥寺西方遺跡の範囲と構造を明らかにすることを目的としている。平成 20 年度から実施し、今回で 10 年目の調査になる。

飛鳥寺西側一帯は、『日本書紀』に度々登場する「飛鳥寺西槻」の地に推定されている。この「飛鳥寺西槻」は、壬申の乱時には軍営が置かれ、蝦夷や隼人などの辺境の人々への饗宴が行われた場所として記されている。このほか、大化の改新前夜に、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通じて出会った場所とも考えられている。文献史料を読み解くと、飛鳥寺の西側には、槻の樹があり、大勢の人々を集めて饗宴や軍営を置くほどの広い空間が広がる“槻樹の広場”があったと考えられている。

今年度の調査地は、飛鳥寺西門跡から西へ約 100～140mにある水田である。調査区は 3 箇所設定し、北から順に 1～3 区とした。3 区が所在する水田は小字「土木」と呼ばれ、かつては飛鳥寺西の槻樹の推定地として有力視されていた。この水田の北半で行われた飛鳥京跡第 77 次調査では調査区の東半で石敷や南北方向の石組溝と掘立柱塀、西半では飛鳥川の氾濫原が確認された。調査地周辺は飛鳥川の氾濫を受け飛鳥時代の遺構が希薄であると考えられた。しかし、1 区に隣接して行われた飛鳥京跡第 168 次調査では古代の石敷、2・3 区に隣接して行われた村教委平成 25・26 年度調査では飛鳥時代の石組溝と 2 棟の掘立柱建物が確認された。なかでもこの掘立柱建物は柱抜き取り穴に焼土や壁土を包含しており、壬申の乱に関連する遺構と考えられている。こうして調査地周辺に展開する飛鳥時代の遺構が、遺跡の西側にどこまで広がっているのかどうか明らかにし、遺跡の範囲を検討する手がかりを得ることを目的とした。調査面積は合計 468.2 m² である。

2. 調査区の概要と主な検出遺構

1 区 調査区は L 字形のトレンチと方形と長方形のサブトレンチからなる。調査面積はあわせて 240.2 m²。調査区の基本層序は、上から耕作土、床土、灰褐色土の順で堆積し、地表下約 30 cm で飛鳥川の氾濫による灰白色砂礫土となる。灰白色砂礫土の上面で遺構検出を行ったところ、石組溝と建物跡が確認した。

《石組溝》

1 区北側で検出した東西方向に延びる石組溝。溝の底石のみが遺存し、底石の両側には石の抜き取り痕跡が認められることから、側石を持つ石組溝と判断できる。上面が平坦な 15～20 cm 大の石を敷き詰めて底石とし、溝幅（底石幅）は 90 cm を測る。石組溝に沿って溝敷設のための掘形が確認できるが、この掘形は調査区の西端まで延びており、さらに西側に延長していたとみられる。一方、溝の東側は、隣接して行われた飛鳥京跡第 168 次で石敷 S X 1045 として検出されており、この石組溝は少なくとも東西 21m 以上にわたって延長していることがわかった。

《建物跡》

1 区南側で検出した桁行 8 間以上の東西建物。東西の桁行が調査区外に延びているため建物規模は不明。桁行の柱間寸法は 2.4m を測り、建物の桁行長は 19.2m 以上である。梁行の柱間は調査区外にあるため不明だが、梁行側柱の芯々距離は 4.8m 測る。柱掘形の平面形状は隅丸方形を呈し、一辺 90～135 cm を測る。柱痕跡は径約 15～40 cm である。柱掘形の深さは 44～72 cm と比較的浅いのは、飛鳥時代の整地面が削られたことによる。柱抜き取り穴は埋土に礫や人頭大の石を含み、平面形状は長楕円形や不整形などがある。

2 区 調査区は南北 16m、東西 3m で設定し、調査面積は 48 m²。調査区の基本層序は、上から耕作土、にぶい黄橙色砂質土、褐灰色砂質土、暗灰黄色砂質土の順で堆積し、地表下約 70 cm で飛鳥川の氾濫による灰白色砂礫土となる。遺構は暗灰黄色砂質土上面で焼土を包含した不整形の土坑 1 基、灰白色砂礫土上面で土坑 4 基を確認した。隣接する村教委平成 25・26 年度調査では焼土

混じりの柱抜き取り穴が確認されていることから、その関連を窺わせる。

3区 調査区は南北10m、東西18mで設定し、調査面積は180㎡。同敷地内の北半で飛鳥京跡第77次調査が行われている。調査区の基本層序は、上から耕作土、床土、暗褐色砂質土、灰褐色砂質土の順で堆積し、地表下約80cmでにぶい黄褐色砂質土となる。にぶい黄褐色砂質土上面（飛鳥時代の遺構面）で遺構検出を行い、集石遺構と掘立柱建物を確認した。集石遺構は調査区の南側に集中し、人頭大の石と拳大の石が面を整えずに敷き詰められていた。石の目地に奈良・平安時代の遺物が入り込むことから、後世の攪乱によって石が動かされているとみられる。氾濫による石の集積とは考えにくく、飛鳥時代の遺構面に広がることから、調査区周辺まで飛鳥時代の石敷が広がっていたと考えられる。このほか、調査区の東側には古代以降の2間×3間の掘立柱建物が1棟確認できた。

出土遺物

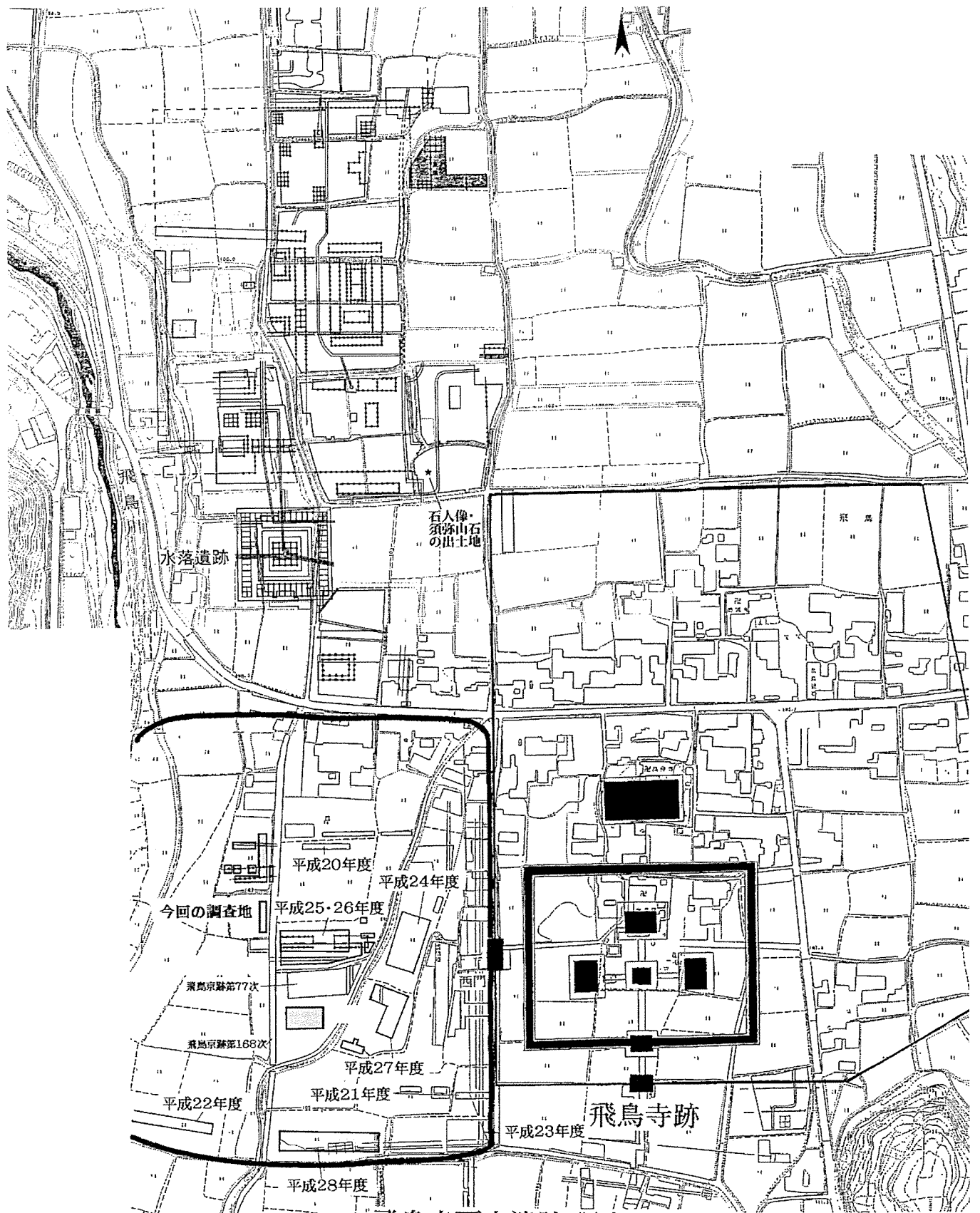
調査区内から土師器、須恵器、瓦、黒色土器、緑釉陶器などが出土した。出土遺物の多くは遺物包含層（暗褐色土）からの出土であり、奈良・平安時代に位置づけられる。なお、遺構からの出土遺物は少なく、遺構の時期を明らかにすることができなかった。

3. まとめ

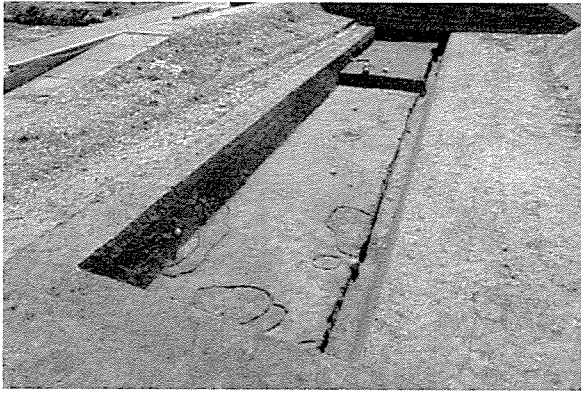
今回の調査地周辺は、過去の調査によって飛鳥川の氾濫原が広がっているとされ、地形的にみても飛鳥時代の遺構は残っていないと思われた。この予想に反し、地形的に低い1区で飛鳥時代の石組溝と建物跡を確認することができた。これらの遺構は、飛鳥川の氾濫原（砂礫層）の上に整地土を置き、その上面に構築されていた。しかし、その整地土は後世に削平されているため、時期の特定できる遺物が失われ、遺構の年代を明らかにすることができなかった。ただ、これまで行ってきた飛鳥寺西方遺跡の調査によって、飛鳥寺西門から飛鳥川周辺に至る東西約120mの範囲には飛鳥時代の遺構が展開することが明らかとなってきた。今回確認した二つの遺構は飛鳥寺西門から約140mの位置にあるものの、遺構が東西に展開する状況から見ても飛鳥時代の遺構が飛鳥川近くまで広がっていたことは間違いない。

また、今回確認された建物跡は飛鳥寺西方遺跡では4例目の建物跡となった。この建物跡は東西8間以上と長大であるが、石神遺跡や水落遺跡の建物群と比べると規模や構造はやや劣る。飛鳥寺西方遺跡内では比較できる建物跡が少ないものの、この建物が飛鳥時代に相当し、建物規模と立地から判断して饗宴施設に伴う施設であったと考えられる。遺構が希薄とされていた飛鳥川周辺からこのような本格的な建物跡が確認されたことによって、飛鳥川沿いの未調査部分においても飛鳥時代の遺構が展開していた可能性は十分にあると思われる。

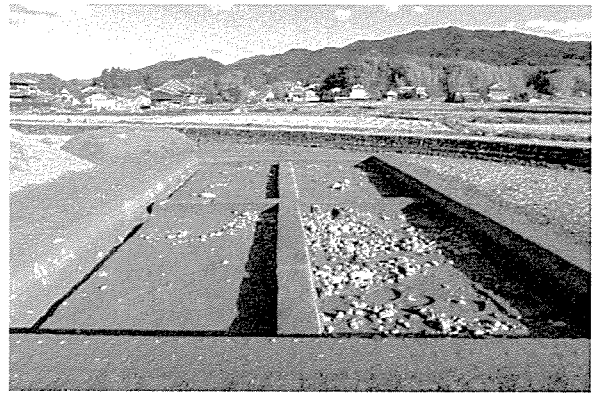
今回の調査によって、‘飛鳥寺西’の槻樹の広場の範囲を検討する上で重要な資料を得た。なかでも建物跡は、同じ‘飛鳥寺西’の遺跡群である石神遺跡や水落遺跡と比較できる資料となるだろう。今後、多様な服属儀礼の場である‘飛鳥寺西’遺跡群のなかで飛鳥寺西方遺跡を理解し、相互に比較、検討していく必要があるだろう。



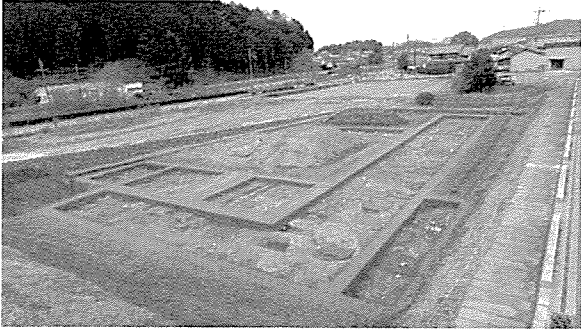
飛鳥寺西方遺跡 調査区配置図



2区全景 北西から



3区全景 西から



1区全景 南東から



1区建物跡 東から



1区石組溝 西から



1区石組溝 東から

調査機関	調査回数	飛鳥時代の遺構
橿原考古学研究所	飛鳥京第 11 次	石敷帯、砂利敷、南北石組大溝、南北石組小溝
〃	飛鳥京第 18 次	石列
〃	飛鳥京第 77 次	南北石組溝、南北石列、南北掘立柱塀、砂利敷
奈良文化財研究所	飛鳥寺周辺	南北縁石、礫敷、瓦敷
〃	1996-2 次	南北石組大溝、南北掘立柱塀、土管暗渠、南北石組小溝
明日香村教育委員会	平成 20 年度	石列の一部
〃	平成 21 年度	南北石組大溝、土管暗渠、石敷帯、砂利敷、柱穴
〃	平成 22 年度	飛鳥川の氾濫原
橿原考古学研究所	飛鳥京第 168 次	礫敷、石敷、土坑列、落ち込み、溝
明日香村教育委員会	平成 23 年度	南北石組大溝、木樋暗渠、東西石組溝、石列、砂利敷、柱穴
〃	平成 24 年度	砂利敷、石敷、大型土坑 2 基（内、1 基は井戸カ）
〃	平成 25 年度	東西石組溝、建物側柱列、砂利敷
〃	平成 26 年度	東西掘立柱建物 2 棟（2 間×7 間）、砂利敷
〃	平成 27 年度	南北石組溝、2 段積み石列
〃	平成 28 年度	石組溝 1（水路跡）、石組溝 2、石列、建物跡
〃	平成 29 年度	石組溝、東西掘立柱建物（東西 8 間以上）

表 1 飛鳥寺西方遺跡調査一覧

*** 関連史料『日本書紀』 ***

- ① 皇極三年（644）正月乙亥朔条
中臣鎌子連、（中略）偶に中大兄に、法興寺の槻樹の下に、打毬の侶に預りて、皮鞋の毬の隨に脱げ落つるを候りて、掌中に取置ちて（後略）、
- ② 孝徳即位前紀大化元年（645）六月乙卯条
天皇、皇祖母尊、皇太子、大槻樹の下に群臣を召集めて盟はしめたまふ。
- ③ 斉明三年（657）七月辛丑条
須彌山の像を飛鳥寺の西に作る。且つ孟蘭盆会を設く。暮に都賀籙人に饗たまふ。
- ④ 斉明五年（659）三月
甘檮丘の東の川上に、須彌山を造りて、陸奥と越との蝦夷に饗たまふ。
- ⑤ 天武元年（672）六月己丑条
爰に留守司高坂王、及び兵を興す使者穗積臣百足等、飛鳥寺の西の槻の下に據りて營を為す。（中略）爰に百足馬に乗りて緩く来れり。飛鳥寺の西の槻の下に逮るに、（後略）
- ⑥ 天武六年（677）年二月条
是の月、多禰島人等に飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ。
- ⑦ 天武九年（680）七月甲戌朔
飛鳥寺の西の槻の枝、自ら折れて落つ。
- ⑧ 天武十年（681）九月庚戌条
多禰島の人等に飛鳥寺の西の河邊に饗し、種種の樂を奏す。
- ⑨ 天武十一年（682）七月戊午条
隼人等に飛鳥寺の西に饗へたまひ、種種の樂を発す。
- ⑩ 持統二年（688）十二月丙申条
蝦夷の男女二百一十三人を飛鳥寺の西の槻の下に饗へたまふ。
- ⑪ 持統九年（695）五月丁卯条
隼人の相撲を西の槻の下に觀したまふ。

小山田遺跡の調査

鈴木 一議

(奈良県立橿原考古学研究所)

1. はじめに

小山田遺跡は、高市郡明日香村大字川原に所在しており、その範囲の大半が、奈良県立明日香養護学校の敷地内にあたる。小山田遺跡周辺の地形は、養護学校の建設にあたり大きく改変を受けているが、旧地形の状況を見ると、甘樫丘から南にのびる尾根上に立地していることがわかる。周辺の遺跡の立地状況を見ると、甘樫丘から西へ派生する尾根の南斜面に、菖蒲池古墳をはじめとした飛鳥時代の古墳が、数多く築かれていることがわかる。

今回は、小山田遺跡におけるこれまでの発掘調査成果を振り返るとともに、近年の継続調査で得られた成果について報告する。

2. 小山田遺跡の調査

小山田遺跡では、これまで合計9回の発掘調査がおこなわれている。発掘調査の性格については、調査原因によって大きく2つに分けることができる。1つ目は、養護学校の整備等に関わるもので、第1～5次調査がそれにあたる。2つ目は、小山田遺跡の範囲確認調査に関わるもので、第6次調査以降がそれにあたる。小山田遺跡の範囲確認調査は、養護学校の校舎改築に伴う事前調査により（第5次調査）、石を伴う大規模遺構が検出されたことが契機である。

ここでは、第1～4次調査の成果から、第5次調査より前に小山田遺跡の性格がどのように位置づけられていたのかを確認する。そして、第5次調査以降の調査成果から得られた新たな位置づけについて確認する。

(1) 小山田遺跡の過去の位置づけ

第1次調査 小山田遺跡の発見の契機となった調査である。1972年12月に学校敷地内の工事で掘り上げられた土の中に、木簡らしき木片があることが養護学校から橿原公苑考古博物館（現在の当研究所附属博物館）に知らされ、当研究所によって現地調査がおこなわれた。出土した木簡は、その内容から藤原宮期のものであることが明らかとなった、また、木簡の出土地点は、谷部分にあたることから、周囲に遺跡が存在する可能性が指摘された。

第2次調査 第1次調査地とは、旧地形の尾根をはさんで西側の谷部分の調査である。特に顕著な遺構・遺物は確認されなかったが、遺跡の中心が旧地形の尾根部分にあることが指摘された。

第3次調査 尾根部分の調査である。調査区全体で自然の地盤が露出している状況で、遺構の多くはすでに消滅している可能性が指摘された。しかし、室生安山岩片が数点出土した。

第4次調査 第1次調査地に近接する部分での調査である。調査地が谷部分にあたることを追認したほか、方形に加工した室生安山岩が出土した。

以上の調査成果から、小山田遺跡については、尾根上に藤原宮期の官衙的な施設が存在していた可能性が指摘されていた。

(2) 小山田遺跡の新たな位置づけ

第5・6次調査 第3次調査区の北側における調査である。石を伴う大規模な掘り割りを検出した。掘り割りは、検出長約48mで、東西方向に直線的にのびる。北側斜面には、飛鳥近辺で採取できる石英閃緑岩を石材の平坦面を掘り割り側に向けて貼っている。掘り割りの底面には、北側斜面と同じく石英閃緑岩を敷いている。底面の幅は約3.9mで、南側の幅約0.8mの範囲は、やや大きめの石を敷いている。

掘り割りの南側では、板石を積んでいる状況が確認できた。よって、その詳細を明らかにすべく、第5次調査に並行し、第6次調査として国庫補助による範囲確認調査をおこなった。板石積みは、基底に吉野川周辺で採取できる結晶片岩（緑泥片岩）を石材の端面を揃えて2段に積み、その上に室生周辺で採取できる室生安山岩を石材の端面を約10cmずつずらしながら階段状に積む。養護学校建設以前の旧地形と検出した遺構の状況から、これらが古墳に伴うものであり、板石積みが墳丘北辺にあたりと判断した。新たな飛鳥時代の大規模古墳の発見である。

第7次調査 第5・6次調査の成果を受け、掘り割りと墳丘の規模を明らかにすることを目的に、掘り割りの西延長線上で調査をおこなった。その結果、掘り割りと墳丘が調査区までおよばないこと、古墳の築造にあたり、周辺を大規模に造成していることが明らかとなった。

第8次調査 墳丘南端部の様相と横穴式石室の有無を確認することを目的に、養護学校敷地内の南端部において調査をおこなった。第8次調査では、小規模面積の調査であったが、小山田遺跡に関する多くの成果を得ることができた。1つ目は、墳丘盛土の検出である。これにより、墳丘南端が、さらに南へ位置することが明らかとなった。また、墳丘盛土中から軒丸瓦片が出土したことにより、古墳の築造時期が飛鳥時代前半以降であることが判明した。2つ目は、横穴式石室羨道痕跡の検出である。これにより、第5次調査以来検出してきた一連の遺構が、古墳に伴うものであることが確定的となったほか、羨道基底石の抜き取り穴間の幅が約2.6mであることから、石舞台古墳に比肩する大型横穴式石室をもつ可能性が明らかとなった。第8次調査の一連の成果から、小山田遺跡における古墳について、一辺約70mの方墳となる可能性が高まった。

第9次調査 第8次調査の成果を受け、横穴式石室の規模と構造を明らかにすることを目的に調査をおこなった。その結果、横穴式石室羨道基底石の抜き取り穴の規模から、小山田古墳の横穴式石室が、巨石を用いた大型横穴式石室であった可能性がより高まった。また、基底石関連の遺構検出状況から、羨門の位置が確定し、羨道の検出長は約8.7mとなった。そのほか、基底石抜き取り穴から矢穴をもつ石材が出土した。矢穴は、その形状から江戸時代後半頃のものともみられ、石材の抜き取り時期の一端が判明したことも大きな成果といえる。

以上の調査成果から、小山田遺跡において、新たな飛鳥時代の大規模古墳の存在が明らかとなった。

3. まとめ

ここまで、小山田遺跡の調査成果について確認してきた。最後に、新たにその存在が明らかとなった小山田古墳についてこれまでの調査成果をまとめ、小山田遺跡における土地利用の変遷について触れ、報告を終えたい。

築造時期 小山田古墳の築造時期については、墳丘盛土中から出土した軒丸瓦片が7世紀前半であること、墳丘外表の板石積みの類例が、宮内庁によって舒明天皇陵に治定される桜井市忍阪の段ノ塚古墳に求められることから、7世紀前半に位置付けられる。

墳丘規模 第5・6次調査で検出した墳丘北辺の状況から、墳形は方形とみられる。第8・9次調査で検出した横穴式石室痕跡が墳丘の中軸線上にあり、墳形が正方形と仮定すると、第3次調査区で墳丘西辺が検出できていないこと、第7次調査区まで墳丘がおよばないこと、第8次調査区で墳丘南辺が検出できていないこと、旧地形の状況から考えて、小山田古墳は一辺約70mの方墳とみられる。同時代の飛鳥とその周辺地域の方墳の規模と比較すると、小山田古墳は最大級の規模をもつと位置付けられる。また、これ以降、これほどの規模の方墳は築かれなくなる。よって、小山田古墳は、最後にして最大級の方墳と位置づけることができる。

横穴式石室の規模 第8・9次調査で検出した横穴式石室痕跡から、羨門幅約2.6m、羨道長8.7m以上となる。基底石抜き取り穴の規模は、南北長0.4～2.6m、東西幅0.4～2.4m、深さ0.2～0.4mを測ることから、巨石を用いていたことは明らかである。古墳の築造時期と現状で把握できる規模から、小山田古墳の横穴式石室は、石舞台古墳に代表される大型横穴式石室であったと考

えられ、石舞台古墳のそれに匹敵する規模をもっていた可能性が高い。

土地利用の変遷 小山田遺跡においては、第8次調査で溝や土坑といった下層遺構を検出しており、出土土器から6世紀後半に位置付けられる。その後、7世紀前半には小山田古墳が築造される。第5・6次調査で検出した掘り割りの埋没状況をみると、板石積みの崩壊→墳丘盛土の崩壊→貼石側からの堆積進行→貼石の崩壊→貼石側からの埋没の進行という過程をたどることができる。そして、貼石崩壊後の堆積層に伴い、飛鳥時代後半の土器類が出土している。よって、第1次調査で出土した木簡などから考えて、飛鳥時代後半には新たな土地利用がおこなわれていたとみることができる。

以上、これまでの小山田遺跡の調査について概観してきた。小山田古墳については、墳丘規模や墳丘範囲の確定、付帯する施設の確認など、まだまだ多くの課題が残されている。これらの課題を明らかにするために、今後も発掘調査を継続的におこなっていく必要があると考えている。

【小山田遺跡関連文献】

- 白石太一郎・前園実知雄1973「明日香養護学校校庭出土の木簡」『青陵』22 橿原考古学研究所
- 東 潮1990「養護学校敷地内」『奈良県遺跡調査概報 1989年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 関川尚功1996「小山田遺跡」『奈良県遺跡調査概報 1995年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 鈴木一議・清水康二・宇野隆志・岡見知紀・西川加奈子2016「小山田遺跡第5・6次調査」『奈良県遺跡調査概報 2014年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 鈴木一議・宇野隆志・岡見知紀2017「小山田遺跡第7次調査」『奈良県遺跡調査概報 2015年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 鈴木一議・木村理恵・岩越陽平・西川加奈子2018「小山田遺跡第8次調査」『奈良県遺跡調査概報 2016年度』（第二分冊）奈良県立橿原考古学研究所
- 鈴木一議・大西貴夫・木村理恵・岩越陽平2018「小山田遺跡第9次調査」『奈良県遺跡調査概報 2017年度』（第一分冊）奈良県立橿原考古学研究所

表 小山田遺跡における調査一覧

次数	調査原因	調査期間	調査面積	主な遺構	主な遺物
第1次	—	S47.12.7	—	—	土器類・木簡
第2次	県立明日香養護学校授産所建設	H元.5.8~6.30	500㎡	—	—
第3次	県立明日香養護学校プール建設	H7.7.25~8.12	200㎡	溝	室生安山岩
第4次	県立明日香養護学校ポンプ室設置	H8.3.27~29	—	—	室生安山岩
第5次	県立明日香養護学校教室棟改築	H26.11.10~H27.3.2	740㎡	掘り割り	土器類・鉄製品 ・室生安山岩・結晶片岩
第6次	範囲確認(学術)	H26.12.8~H27.3.2	20㎡	墳丘北辺	土器類・室生安山岩 ・結晶片岩
第7次	範囲確認(学術)	H27.12.24~H28.1.28	83.7㎡	造成土	土器類・室生安山岩 ・結晶片岩
第8次	範囲確認(学術)	H28.12.22~H29.1.27	57.3㎡	墳丘盛土 ・横穴式石室	土器類・瓦類・室生安山岩
第9次	範囲確認(学術)	H29.7.24~8.31(予定)	182.9㎡	横穴式石室	土器類

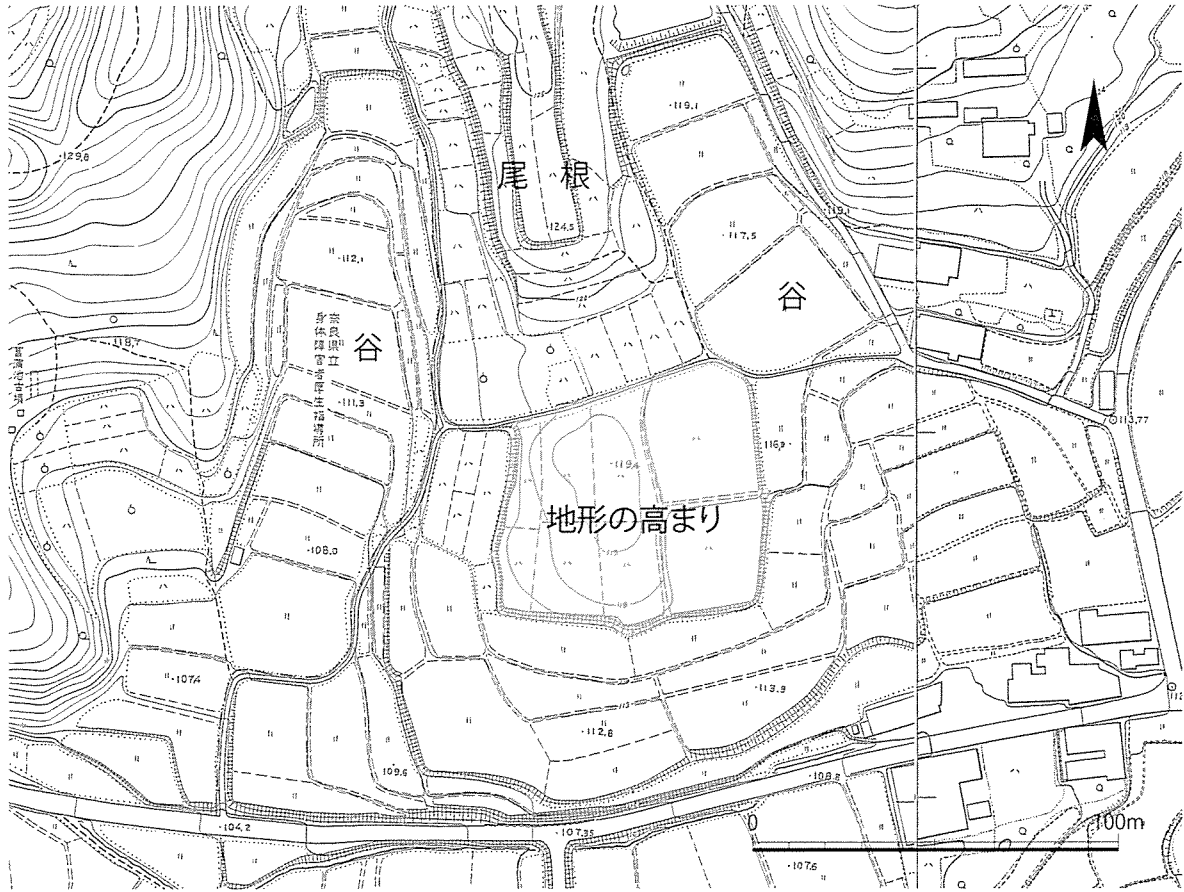


図1 小山田遺跡周辺の旧地形
奈良国立文化財研究所1千分の1奈良盆地地形図「野口」(1963)をもとに作成

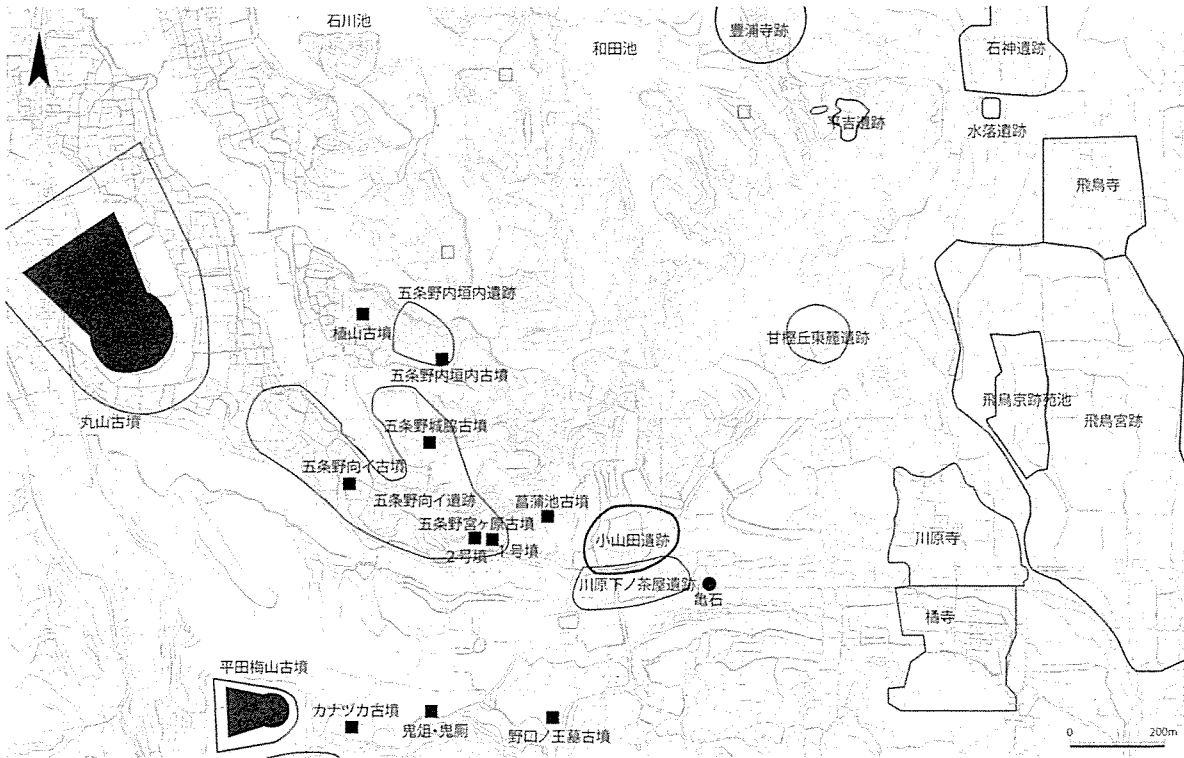


図2 小山田遺跡周辺の旧地形と遺跡
奈良国立文化財研究所1千分の1奈良盆地地形図「野口」・「和田」・「立部」・「越」・「橋寺」・「見瀬」・「飛鳥寺」・
「豊浦」(1963)をもとに作成

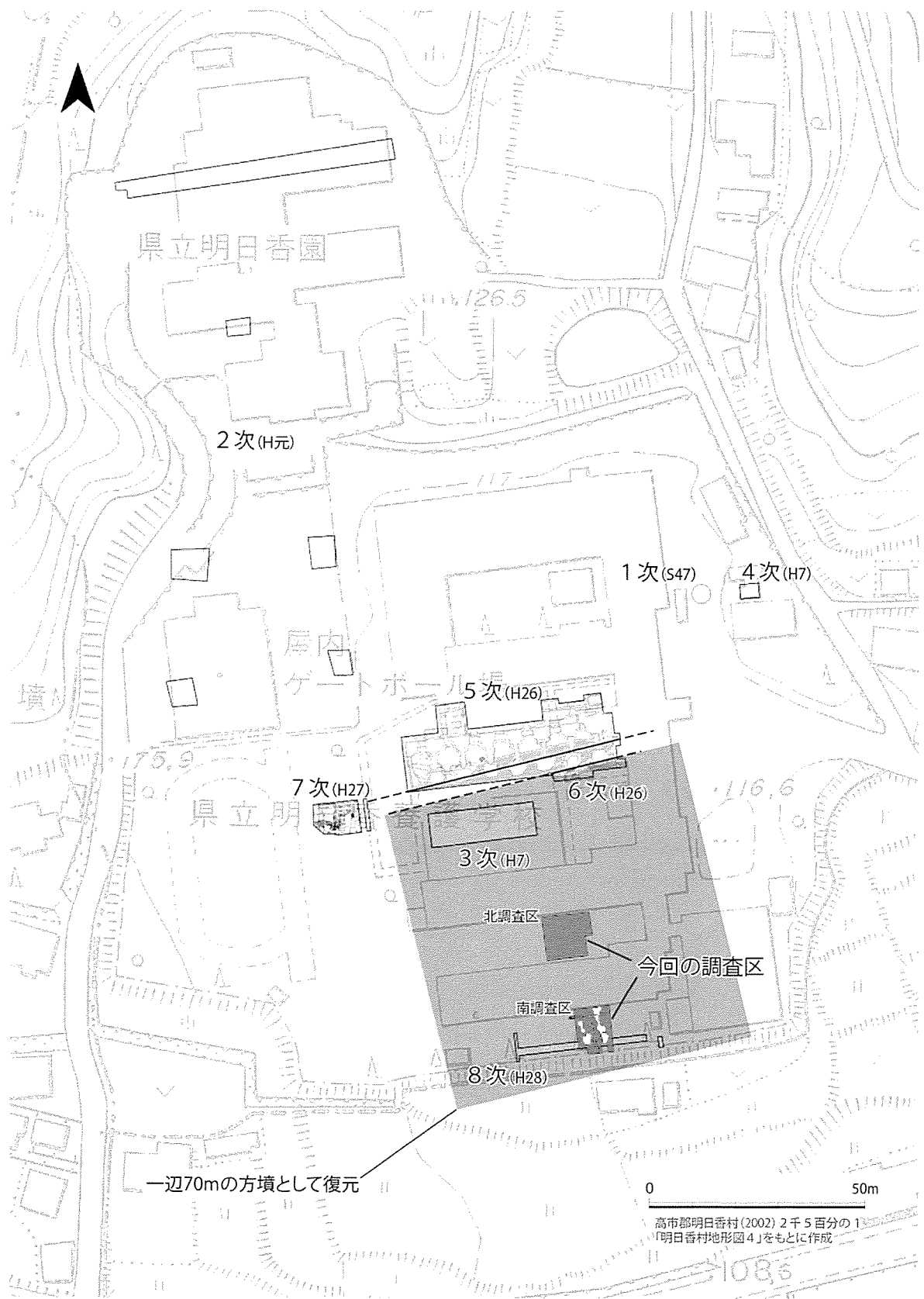


図3 調査区配置図
高市郡明日香村2千5百分の1「明日香村地形図4」(2002)をもとに作成

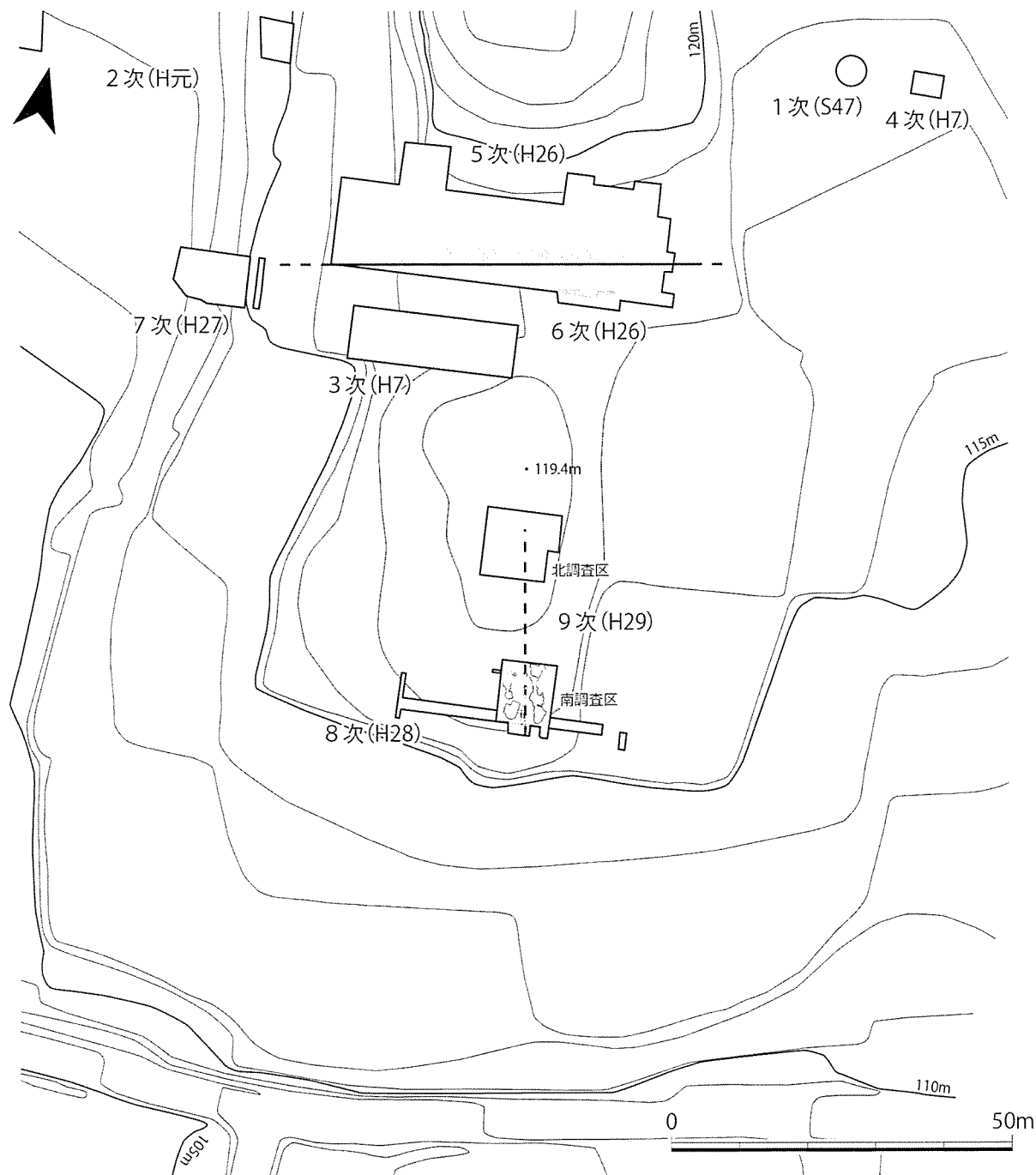


図4 横穴式石室痕跡の位置と墳丘規模復元案
 奈良国立文化財研究所1千分の1奈良盆地地形図「野口」(1963)を再トレースして作成

年代決定の根拠

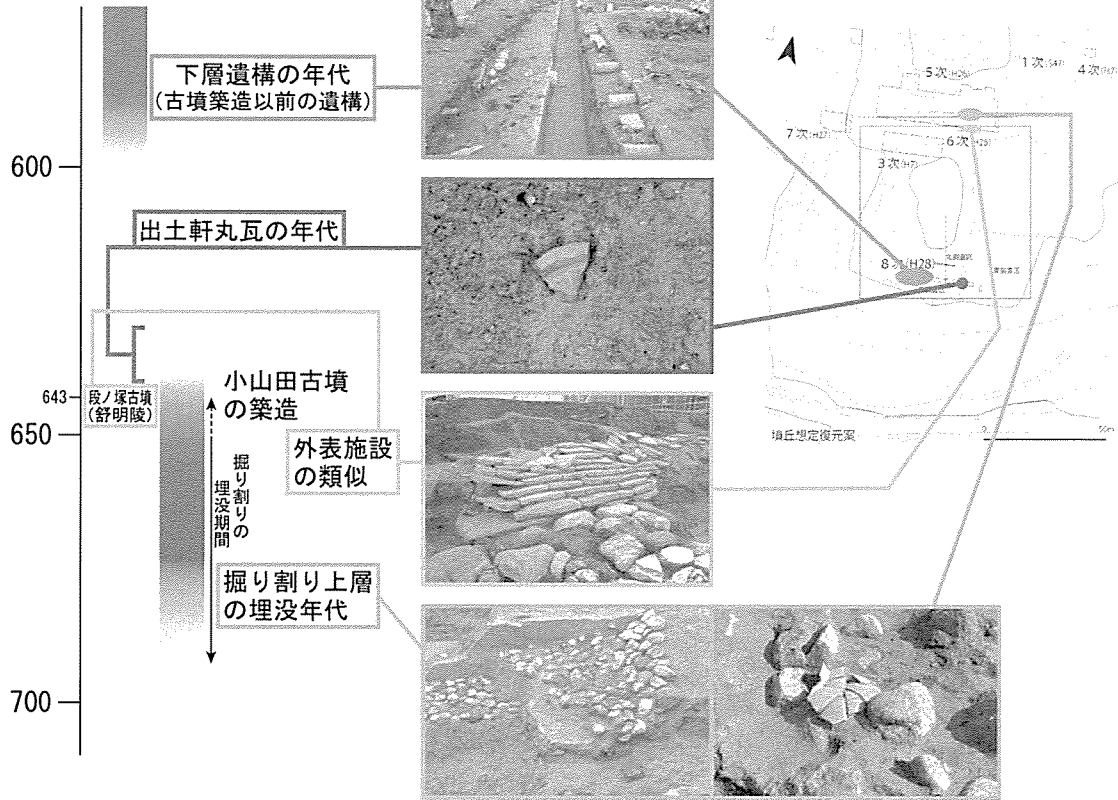
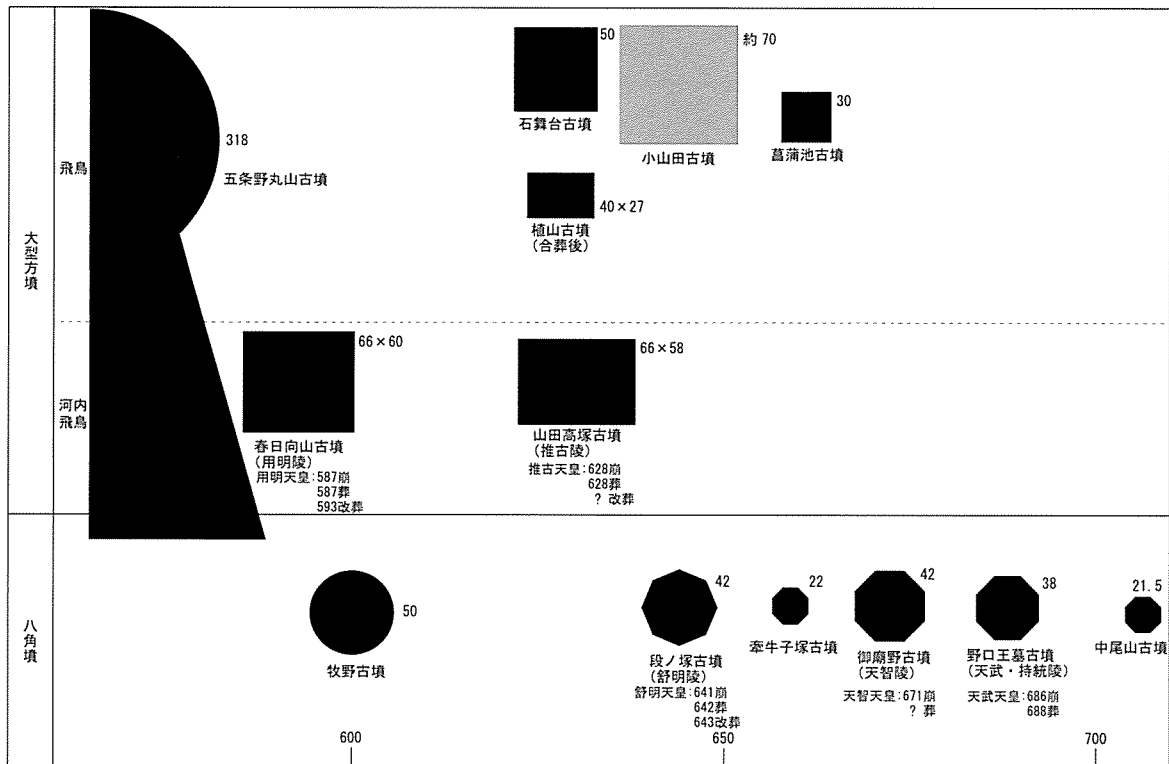


図5 小山田古墳築造時期決定の根拠

墳丘規模の比較と変遷



(墳丘規模の数値は、前方後円墳は全長、円墳は直径、方墳は辺長、八角墳は対辺長を示す)

図6 主要古墳の墳丘規模比較と変遷

舒明天皇の時代と小山田古墳

木下 正史 先生

(明日香村文化財顧問・東京学芸大学名誉教授)

舒明天皇の時代と小山田古墳

2018.3.4 木下 正史

A、小山田古墳の被葬者

1、舒明天皇初葬陵説：

1) 舒明天皇：641年、百濟大宮で崩御。

①642年：滑谷岡(なまぼろのおか)に埋葬。翌年、押坂陵(桜井市段ノ塚古墳)に改葬。

②段ノ塚古墳：八角形墳。榛原石板石を段状に積む。小山田古墳と類似。

2、蘇我蝦夷大陵説：『日本書紀』皇極元年(642)に「今来に、生前に双墓を造る。一つが大陵で蝦夷の墓、一つが小陵で入鹿の墓」とある。

1) 蝦夷・入鹿の甘樞丘の「上の宮門」「谷の宮門」の続き地：拠点に墓を造ったとする

2) 乙巳の変(645年)：入鹿斬殺、蝦夷誅殺。墓に葬り、哭泣ことを許す。

B、『日本書紀』に見える舒明天皇・皇極天皇

1、舒明天皇：629年に即位(推古天皇崩御後)。641年、百濟大宮で崩御。

1) 息長足日廣額天皇(おきなたらしひひろのかのすけのみこと)：田村皇子。敏達天皇の孫で、彦人大兄皇子(ひこひとのおおえのみこ)の子。母は糠手姫皇女(あてひめのみこ、敏達天皇皇女)。

①彦人大兄皇子：押坂彦人大兄皇子ともいう。即位せずに没す。没年不明。皇極天皇の祖父。成相墓に埋葬(大和国広瀬郡、牧野古墳説)。

2) 推古天皇の後継天皇の決定：蘇我大臣蝦夷は田村皇子を推す。境部摩理勢臣は山背大兄皇子(聖徳太子の子)を推し、皇位継承をめぐる争う。

3) 舒明元年正月：蘇我蝦夷が推す田村皇子が即位。舒明天皇となる。

4) 元年4月：田部連を掖玖(やく)に遣す。2年9月に帰る。→南島支配をめざす。

5) 2年(630)正月12日：宝皇女(後の皇極・齐明天皇)を皇后に立てる。

①宝皇女：2男1女を生む。第1は葛城皇子、第2は間人皇女、第3は大海人皇子。

②夫人の法提郎媛(はてのいらつめ 蘇我馬子の女)：古人皇子を生む。

③2年3月：高麗・百濟の使者が朝貢。→朝鮮半島諸国と交流。

6) 2年8月：大仁犬上三田耜・大仁葉師恵日(えち)を大唐に派遣。第1回遣唐使。

①高麗・百濟の客人を朝廷で饗応：

2、飛鳥岡本宮の造営：

1) 2年10月12日：天皇、飛鳥岡のほとりに移る。岡本宮という。「飛鳥」最初の宮殿

①是年：難波の大郡、および三韓の館を修理する。

2) 3年(631)2月10日：掖玖の人が帰化。

①3月：百濟王義慈が王子豊章を人質として奉る。

②9月19日：津国(摂津)の有間温湯に行幸。12月13日、温湯から帰る。

3) 4年(632)8月：唐は高表仁を遣して犬上三田耜を送らせ、対馬に着く。学问僧の靈雲・僧旻(聖徳太子派遣の遣隋留学生)ら新羅の送使に従って帰国。

①10月4日：唐の使者高表仁ら難波津に到着。天皇は大伴連馬養(長徳)を派遣し、江口(淀川河口)で船32隻を揃え迎えさせる。難波吉士小槻・大河内直矢伏に先導させ、館の前に船を着かせ、伊岐史乙等・難波吉士八牛(やつし)に客人を館に案内させる。

②5年正月26日：高表仁ら帰国。送使の吉士雄摩呂・黒麻呂ら対馬まで送る。

4) 7年(635)6月10日：百濟、達率柔(ゆ)らを遣して朝貢。7月7日、百濟客人を朝廷で饗宴。

5) 8年(636)6月：飛鳥岡本宮焼亡。天皇、田中宮に遷る。

6) 8年7月：大派王(敏達天皇の皇子)が豊浦大臣(蘇我蝦夷)に「群卿や百寮が朝廷への出仕をなまけている。今後、卯(午前6時)の始めに出仕し、巳(午前10)時の後に退出させよ。そのために鐘をついて時刻を知らせ、規則を守らせるようにせよ」と言う。大臣は従わず。→官僚を統率する政策を模索。

①9年(637)是歳：蝦夷が叛いて朝貢せず。大仁上毛野君形名を將軍に任じて征討さ

せる。逆に蝦夷に破れ、城壘に逃げ込み包囲される。夫人の助けを得て、蝦夷を撃破して捕虜とする。→北方へ支配地の拡大を図る。

7) 10年(638)10月：有間温湯宮に行幸。11年正月、温湯から帰り、新嘗する。

①10年は歳：百済・新羅・任那が揃って朝貢。

3、11年(639)7月：天皇は「今年、大宮と大寺とを造れ」と詔する。百済川のほとりを宮処とし、西の民は宮を造り、東の民は寺を造る。書直県を大匠とする。

1) 9月：大唐の学問僧惠隱・惠雲が新羅の送使に従って帰国。

2) 11月：新羅の客人を朝廷で饗応し、冠位一級を賜る。

3) 12月14日：天皇、伊予温湯宮(ゆのゆ、道後温泉)に行幸。

4) 是月：百済川のほとりに九重塔を建て(造営着手後3ヵ月足らず)。

5) 12年(640)4月16日：天皇は伊予から帰り、厩坂宮に住む。

6) 12年10月11日：大唐の学問僧清安(南淵漢人請安)、学生高向漢人玄理が新羅経由で帰国。百済・新羅の朝貢使も共に来朝。それぞれに爵(冠位)一級を賜る。

7) 12年10月：天皇、百済宮に移る。→1年3ヵ月の造営期間(壮大な宮殿)

4、13年(641)10月9日：天皇、百済宮で崩御。

1) 10月18日：宮の北で殯を行う。「百済の大殯」という。東宮の開別皇子(葛城皇子=天智天皇)が16才で誅する。古人大兄皇子ではなく、蝦夷権力に陰り。

5、皇極元年(642)正月15日：舒明皇后が皇極天皇として即位。蘇我蝦夷を元通り大臣とする。子の入鹿は国政の実権を握り、その勢威は父以上であった。

1) 元年(642)9月3日：皇極天皇は大臣に詔して、「大寺を起し造らむと思欲ふ。近江と越の丁を発せ」と、百済大寺の造営を命じる。造寺司(長官)に阿倍倉橋麻呂と穂積百足を任命。

①阿倍倉橋麻呂(内麻呂)：?~649。大化改新後の難波政権で左大臣(右大臣は蘇我倉山田石川麻呂)。軽皇子(孝徳天皇)の寵妃の小足媛(有間皇子の母)の父。

②阿倍氏の本拠地：吉備池廃寺の東隣の阿部。文殊院西古墳・艸墓(くさか)など阿倍氏の墳墓が集中。文殊院西古墳は阿倍倉橋麻呂墓か。

2) 元年9月19日：天皇は大臣に詔して、「今月から12月までの間に、宮殿(飛鳥板蓋宮)を造営しようと思う。国々で用材を伐採させよ。東は遠江、西は安芸までの国々から、宮殿を造営するための人夫を徴発せよ」と命じる。

①元年9月21日：越の蝦夷数千人が帰服。10月12日、蝦夷を朝廷で饗応。

3) 元年12月13日：この日から舒明天皇の喪葬の儀を行う。小徳巨勢臣徳太が大派皇子(敏達天皇皇子=舒明天皇の叔父)に代わって誅し、次に小徳粟田臣細目が軽皇子(孝徳天皇)に代わって誅し、次に小徳大伴連馬飼が大臣に代わって誅する

①12月14日：息長山田公が日嗣の誅を申し上げる。

4) 元年12月21日：舒明天皇を滑谷岡に埋葬。

①この日：天皇は小墾田宮(或本に東宮南庭の仮宮)に移る。

5) 2年(643)4月28日：皇極天皇、仮宮から飛鳥板蓋宮に移る。

6) 2年9月6日：舒明天皇を「押坂陵」に改葬。

C、『日本書紀』に見える蘇我蝦夷・入鹿

1、蘇我蝦夷・入鹿の専横：

1) 皇極元年4月8日：百済の大使翹岐(ぎょうき、百済王族)、朝に拝す。

①元年4月10日：蘇我大臣、畝傍家に翹岐等を喚び対話。良馬1匹、鉄20銚を賜う。→外国使節をもてなす。特別の外交権限を持つ。

②元年10月15日：蘇我大臣は蝦夷を家に招いて饗応し、言葉をかける。

2) 元年是歳：蘇我大臣蝦夷、己の祖廟を葛城の高宮に立て、八イ舞を行う。

①国中の民や百八十部曲(ももあさりそのかきのたみ、豪族私有民)を徴発：前もって今来に双墓を造る。一を大陵と呼んで蝦夷の墓とし、一を小陵と呼んで入鹿臣の墓とす

②上宮の乳部(みゆ、聖徳太子のために置かれた部)の民を悉く集めて、墓所に使役。

- ③上宮大娘姫王(太子の娘。春米女王か)：「蘇我臣は国政を専横し、無礼な振舞いが多い。天に二つの太陽がないように国に二人の君主はいらぬ。なぜ、上宮に賜った民を悉く使役するのか」と憤慨。
- 3) 皇極2(643)年10月6日：蘇我大臣蝦夷は病のため出仕せず。勝手に紫冠を子の入鹿に授けて大臣の位に擬える。
- 4) 2年10月12日：蘇我臣入鹿、独断で上宮の王等を廃し、古人大兄(舒明天皇の子、母は蘇我馬子の女法提郎媛)を天皇に立てようと謀る。
- ①2年11月1日：蘇我臣入鹿、小徳巨勢徳太臣らを遣し山背大兄王等を斑鳩に襲わせ上宮王家を滅ぼす。→天皇后継問題に決着をつけようと武力行使に踏切る。
- ②蝦夷：入鹿が山背大兄王等を滅ぼしたと聞いて、愚かで、暴挙をしたものだ。自らの命も危うくなるというのにと嘆く。
- 5) 3年(644)11月：蘇我大臣蝦夷と入鹿は家を甘檮岡に並べ建て、大臣の家を上宮門(みかど)、入鹿の家を谷の宮門と呼び、男女を王子(みこ)と呼ぶ。家の外に城柵を造り、門の脇に兵庫(つかもぐら)を造る。門毎に水を満たした舟1つと木鉤(とびくち)数10を置いて火災に備える。屈強な男に武器を持たせていつも家を守らせる
- ①大臣：長直に命じて大丹穂山(おおくほやま、明日香村入谷か)に梓削寺(しりけり)を造らせる。畝傍山の東にも家を建て、池を掘って城とし、武器庫を建てて矢を貯える。大臣はいつも兵士50人を連れ、身の周囲にめぐらして家から出入りするこれらの屈強な男達を東方(あづま)の僮従者(しとべ、東国出身の従者)と言う。諸氏の人々がその門に奉仕し、名づけて祖子孺者(おのこらわ、先祖代々仕えている者の意か)といった。漢直たちは大臣と入鹿との2つの門に奉仕した。
- 6) さまざまの専横行為：『日本書紀』は蘇我氏が不評をかったように記載。
- 7、皇極4年(645)6月8日：中大兄皇子ら飛鳥板蓋宮で蘇我入鹿を斬殺。大化クデター(乙巳の変)。古人大兄皇子、自らの宮に入り、門を閉ざす。
- 1) 漢直ら：族党を集めて、甲をつけ武器を持って、大臣を助けて陣を張ろうとする
中大兄皇子は巨勢徳陀臣を派遣して君臣の別を説き、武装を解除させる。
- 2) 6月13日：蘇我蝦夷、自らの屋敷に火を放ち、自尽。天皇記・国記、珍宝を焼く
- ①船史恵尺：焼かれようとする国記を取り出して中大兄皇子に奉る。
- 3) 同日：蘇我臣蝦夷および入鹿の屍を葬ることを許し、また哭泣(喪にあつたて悲しみ泣くこと)を許す。
- 4) 6月14日：皇極天皇、軽皇子に譲位(孝徳天皇)。中大兄皇子を皇太子とする。
- ①古人大兄：法興寺の仏殿と塔の間で髭や髪を剃り、袈裟をつけて出家。
- 8、本宗家滅亡後の蘇我一族：政府の要職につくが、「蘇我氏の時代」は幕を閉じる。

D、八角形墳の成立と舒明天皇押坂陵

- 1、八角形墳：天皇特有の墳丘形態として、舒明天皇陵から始まる。
- 1) 皇極元年(642)12月21日：舒明天皇を「滑谷岡」に埋葬(明日香村冬野か)。
- 2) 皇極2年(643)9月6日：舒明天皇を「押坂陵」に改葬。
- ①改葬後の「滑谷岡」の陵墓：どうなったか、全く不明。
- 3) 『延喜諸陵式』記載の押坂内陵：「押坂内陵。高市郡岡本宮御宇舒明天皇、在大和国城上郡、兆域東西九町、南北六町、陵戸三烟」。
- 4) 『陵墓要覧』：桜井市大字忍坂字段ノ塚の古墳を舒明天皇押坂陵とし、上円下方墳とする。父母の忍坂彦人大兄皇子と糠手姫(田村)皇女を合葬と記載。
- 2、八角形天皇陵：舒明天皇押坂陵→齐明天皇陵(牽牛子塚古墳)→天智天皇山科陵→天武・持統合葬陵→文武天皇陵(中尾山古墳)と5代の天皇に継承。
- 3、八角形墳の思想背景：中国の道教的な政治・祭儀思想。宇宙の隅々を示す。
- 1) 八角形：漢武帝は八角壇を築き、地の祭りを行う。天子の象徴。
- 2) 天皇の亭は八角亭。舞楽は8人8列で行う八佾舞(やつらのみ)。8は天皇を象徴する数
- ①八佾舞：中国の習俗。天子にのみ許される特権。
- ②皇極元年(642)条：蘇我大臣蝦夷が、祖廟を葛城の高宮(奈良県御所市)に立てて、

八佾舞を行う。

③王(皇子)の亭は六角亭。舞楽は六佾舞。6は王を象徴する数。

3) 高御座：玉座。即位・朝賀の儀式などで使う八角形黒漆塗りの屋形。三段の壇上に八角形の屋形を乗せる。

4、舒明天皇押坂内陵(宮内庁の調査)：

1) 位置・立地：奈良県桜井市大字忍坂字段ノ塚。外鎌山から南に派生する支丘の南斜面の南末端に築く。北側で支丘を切断して築く。

2) 昭和35年(1970)の宮内庁の調査：上円丘の裾周りで、19.7m離れて隅角石2個を検出。隅角石の角度は135度。八角形墳で、一辺長19.7mと判明。

3) 平成4・6年(1996・98)の宮内庁の調査：一部を発掘して墳丘の外形を調査。

①墳丘：下方部3段、上円部2段。全長約72m、下方部下段の幅90m超と判明。

5、上円部：2段築。高さ約13.5m。

1) 上円部上段：墳頂から4.5mに位置。平面八角形。

①大正9・15年(1920・26)の実測図：標高155m付近に上段の裾部。径約31m、南側の高さ約9m、北側の高さ約8m。墳頂部平坦面径約8m、斜面角度34~38度。上段は下段に比べて急傾斜。相当に変形していると思われる。

②正面の裾部のボーリング棒探査：横穴式石室羨道部天井大石の感触がある。

2) 上円部下段：平面八角形。上段と同様に、南正面が隅切りとなる。

①南西隅角：剣菱形に角石が突出。その上に板石を平積み。傾斜角28~34度。

②南側各辺：裾部に地覆石を敷き並べ、その上に4枚前後の榛原石板石を平積みして墳丘裾の護石とする。

③規模：対角線間の距離約46m。対辺間の距離約42m。

3) 上円部下段裾部：緩傾斜面が一周。南から西北は幅約2m、北から東北は幅約5m

4) 上円部の榛原石積みの状況：小山田古墳の北側石積み状況と共通する。

6、下方部：上円部の基壇。3段の方形壇。地形の高い北側では段は不明瞭。

1) 下段部：上半部と下半部とに分けられる。

①下半部：花崗岩山石からなる貼石が東西に帯状に露出。大きい石は1m超。貼石は上半部に及ぶ。「幕末の修陵」に関わる可能性もある。

②上半部：各所に大石が存在。西端の隅に花崗岩大石2個が原位置を保つ。

③下段部正面のテラス：幅4~6m、残りの良い東端付近では幅約5m。

2) 中段部：

①南正面：貼石。高さ4m、幅5~6m、東西上辺長68m、下辺70m。傾斜30~45度

②中段の東西各辺：南辺に鋭角に交わる。

③テラス幅：約5m。敷石は認められない。

3) 上段部：最も旧状をとどめる。

①南辺：高さ約3.5m、幅4m弱、東西長約50m(上辺)~56m(下辺)。傾斜角45度。貼石がある可能性がある。ボーリングにより西斜面・東斜面も同様と推定。

②上面テラス：南正面側で明瞭(幅は約3m)。東西両側は緩斜面。

4) 墳丘の特色：正面に南隅角が位置し、隅切りとなる。横穴式石室と関係か。

E、百濟大寺—最初の天皇発願の寺—

1、文献、記録に見る百濟大寺の歴史：

1) 『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』(天平19年=747成立)：田村皇子(舒明)が病床の聖徳太子を見舞った時、太子建立の熊凝精舎の後事を託され、大寺の建立に至った。→聖徳太子の遺志をついで百濟大寺を建立。

2) 舒明11年(639)7月(『書紀』)：百濟川のほとりに大宮と大寺を造営。西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。書直県(渡来系)を大匠(官の組織)とする。

①舒明11年(639)12月(『書紀』)：百濟川辺に九重塔を建てる。「百濟大寺」と呼ぶ

②百濟大寺焼亡：造営するにあたり、子部社を切り払ったために子部神の怒りを受

け、ほどなく九重塔、金堂石鷗尾が焼失(『大安寺伽藍縁起』)。

- 3) 皇極元年(642)9月：舒明天皇の遺志を受け継ぎ、百済大寺を造営(『書紀』)。
 - ①造営：近江から越までの北陸の丁を徴発。
 - 4) 皇極天皇の代：造寺司に阿倍倉橋麻呂、穗積百足を任命(『大安寺伽藍縁起』)。
 - 5) 大化元年(645)：孝徳天皇は百済大寺に使いを遣わして、僧尼に仏教の修業につとめること、諸寺造営の助成を諭す(『書紀』)。
 - 6) 皇極天皇の時：百済大寺は結構を整えていたはず。
 - 7) 天智7年(668)：丈六釈迦像、脇土像を造り、百済寺に安置(『書紀』)。
 - 8) 百済大寺：舒明崩御後、皇極、天智天皇によって造営・造仏が続けられる。
- 2、蘇我氏滅亡後の仏教と寺院：主導権は朝廷に移り鎮護国家仏教への歩みを強める。
- 1) 齊明6年(660)：日本・百済と唐・新羅との間で戦争(白村江の戦)。
 - ①齊明天皇：僧100名を招いて「仁王会」(「仁王般若会」)を修する。
 - ②「仁王般若経」：国土が乱れ、外敵侵入が予想される時、国王が百僧を請い「仁王経」を講ずるならば、仏法護持の鬼神が集まり国土を守護・護持すると説く。
→朝鮮半島の軍事情勢に危機感を深め、鎮護国家の法会を行う。
 - 2) 「金光明経」：7世紀後半、朝鮮半島経由で伝来。「国土を統治する王は、人間として生まれたとはいえ、母の胎内にある時から仏法を護持する33の諸天の守護を受け、神力を加えられている。国王は出生前から、護法の諸天すなわち神から国王としての使命と高貴な身分を与えられている」と説く。帝王神権説。
 - ①金光明会：「金光明経」を仏前で講読し、仏法の力によって、国土の安穏と万民の豊樂を祈る。
 - 3) 天武・持統朝：飛鳥と畿内・諸国で「金光明経」「仁王経」を盛んに読誦させる。
 - ①天武5年(676)：全国に僧侶を派遣し、「金光明経」と「仁王経」を講読させる。
 - ②持統8年(694)：諸国に「金光明経」100部を頒布。毎年正月上亥の日に読誦させる
 - ③大宝2年(703)：畿内の寺院に「金光明経」の講読を命ずる。
 - ④神亀5年(728)：諸国に対し「金光明経」10巻を頒ち、全国的に講読を強化。
 - 4) 「金光明最勝王経」の伝来・導入：神亀2年(725)、詔を下し、道慈に「金光明経」に代えて「金光明最勝王経」(道慈が唐からもたらす)を大極殿で講読させる。
 - 5) 聖武天皇：「金光明最勝王経」が説く鎮護国家仏教を信奉して、盧舎那仏と東大寺(七重塔)を造り、全国に国分寺(七重塔)を造営。
 - ①国分寺：天平13年(741)、「金光明四天王護国寺」と名づける。
 - ②「金光明四天王護国寺」の意義：「金光明最勝王経」四天王護国品第12が説く、国家の災厄疫病を消除するために、四天王の加護を祈るもの。
- 3、百済大寺から高市大寺(大官大寺)へ：
- 1) 天武2年(673)：百済大寺を高市郡に移す(『大安寺伽藍縁起』など)。
 - ①天武2年12月17日：小紫美濃王、小錦下紀臣訶多麻呂を造高市大寺司に任命(『書紀』・『大安寺伽藍縁起』)。地名によって「高市大寺」と号す。
 - ②この年：齊明天皇の13回忌、舒明天皇の33回忌。父母帝の追善事業。
 - 2) 天武6年(677)9月：高市大寺を改めて「大官大寺」と号す(『大安寺伽藍縁起』)。
 - ①天武11年(682)8月：大官大寺に140人余が出家。寺僧に紵、綿を施す(『書紀』)
 - ②天武13年(684)：天皇病す。草壁皇子、勅を奉じて百僚を率いて大官大寺に詣り造営を続けることを誓願(『大安寺伽藍縁起』など)。
 - ③天武14年(685)9月：天皇不予の為、大官大寺・川原寺・飛鳥寺で誦経(『書紀』)
 - ④朱鳥元年(686)5月：食封700戸、墾田900余町を施入(『書紀』)。経済的基礎確立
 - ⑤朱鳥元年(686)7月：諸王臣等、天皇のために観音像を造り、大官大寺で観音経を説く(『書紀』)。
 - ⑥朱鳥元年(686)12月：先帝(天武天皇、9月崩御)のために無遮大会を大官・飛鳥・川原・小墾田豊浦・坂田の寺で行う(『書紀』)。伽藍は整備されていたはず。

4、官寺制の制定：天武天皇による国家仏教政策。

- 1) 官寺：天皇発願の寺。官府が経済的支えをする。仏教統制や僧尼の任命・管理にあたる中心寺院。国家的な仏教行事、天皇の病氣平癒祈願などに携わる寺院。
 - ②天武9年(680)4月(『書紀』)：「国の大寺」たる二・三を除き、官司が諸寺を管理・援助することを停止。諸寺に与えられていた食封は30年を限るよう定める。
- 2) 飛鳥三大寺(官寺)：天皇勅願の大官大寺・川原寺(弘福寺)と飛鳥寺。
 - ①天武14年(685)9月(『書紀』)：天武天皇の病氣平癒を祈願して、大官大寺・川原寺・飛鳥寺で誦經(ずきょう)を行う。大官大寺が筆頭官寺。
- 3) 藤原京四大寺：大宝3年正月、文武天皇は前年12月に崩御した太上天皇(持統天皇)のために、齋を大官・薬師・元興(飛鳥)・弘福(川原)の四大寺に設ける。
 - ①薬師寺：天武9年(680)11月(『書紀』)、天武天皇が皇后(後の持統天皇)の病氣平癒を祈願して造営。
- 4) 三大寺・四大寺：国家の中心寺院を中心に鎮護国家仏教政策が大きく展開。
- 5) 仏教：官寺を中心に公的性格を強め、「国家の宗教」となっていく。
- 6) 百濟大寺と九重塔の建立：その出発点。

F、百濟大寺(吉備池廃寺)の発見－1997・98年－

- 1、位置：桜井市吉備。香久山の東北方1km。磐余の中心地。東南約1kmに阿倍寺跡。
 - 1) 吉備池畔：檀原市木之本廃寺と同範瓦が出土。木之本廃寺の瓦窯跡と想定。
- 2、金堂跡：吉備池畔東南隅。大きな土壇。南側の水田面から高さ2mの高い土壇。
 - 1) 基壇の掘込地業：東西36m、南北27m～30m。深さ1m。厚さ4cmの互層で版築。
 - ①西北隅：掘込地業内の水を抜く排水溝(礫詰め)。掘込地業外の西北方へ延びる。
 - 2) 基壇規模：東西37m、南北28m(南側の張出部含む)。高さ2m以上。上面削平。
 - ①飛鳥の一級寺院の金堂基壇規模：東西20～22m、南北16～19m。その1.7倍ほど
 - 3) 基壇上：深さ0.7mまで耕作が及ぶ。礎石や抜き穴は残らず、柱位置不明。
 - ①基壇外装：化粧石、凝灰岩片は全く認められない。火災痕跡もない。
 - ②基壇外：東辺で砂利敷を検出。金堂周囲を砂利敷で舗装。
 - 4) 下層の掘立柱建物：柱抜き穴から7世紀中頃の土師器杯が出土。
 - 5) 軒丸瓦：単弁蓮華文軒丸瓦18点出土。径21cm。2割がた大型。
 - ①文様：山田寺式に類似。花卉が長く、弁端が尖るなどより先行する特徴を示す。
 - ②同範瓦：木之本廃寺にあり、製作技法、胎土も共通。
 - ③軒丸瓦の範型：後に四天王寺用の瓦生産にも使用。阿倍倉橋麻呂が関与か。
 - 6) 軒平瓦：瓦当幅が36cmと大型。二種類。ともに木之本廃寺で同範瓦が出土。
 - ①若草伽藍と同一のスタンプ範型による型押し忍冬文軒平瓦……5点。
 - ②同上軒平瓦にロクロ挽きの三重弧文を加えた軒平瓦……1点。
 - ③若草伽藍の軒平瓦：忍冬文のスタンプを上下交互に押し、唐草文の反転を表現
 - ④吉備池廃寺・木之本廃寺の忍冬文：すべて下向きにスタンプを押し。範型は若草伽藍の瓦よりも傷が進む。→若草伽藍の瓦より遅れて製作。
 - 7) 丸瓦・平瓦：全長46cmほど。通常の飛鳥時代寺院の瓦に比べて2割がた大型。
 - ①小型平瓦：出土平瓦の約9%を占める。硬質。薄手。
 - 8) 木之本廃寺の平・丸瓦：吉備池廃寺と共通。小型瓦も含む。残存状況は良好。
- 3、塔跡：金堂跡の西方54mに位置(金堂・塔中心間85m)。高さ2m余の土壇が残る。
 - 1) 基壇：一辺30mの方形。高さ2.1m以上(推定高2.3m)。厚さ3～7cmの互層で版築
 - ①掘込地業：なし。基壇化粧石も全く認められない。
 - 2) 基壇中央の心礎抜き穴：東西約6m、南北8m以上の長形状、深さ0.4m残存
 - ①心礎抜き穴内：人頭大の根石が多数存在。→巨大な心礎を基壇上に設置。
 - ②心礎抜き穴出土土器：7世紀末。心礎が7世紀末までに搬出されたことを示す。
 - 3) 基壇西辺部：心礎を基壇上に引き上げるための20度の傾斜面。
 - 4) 瓦：軒瓦は出土せず、丸・平瓦(金堂と同特徴)も非常に少ない。
- 4、中門跡：金堂の南方約30m、金堂の中軸線より西10.6mに位置。

- 1) 基壇：東西12.0m×南北9.8m。石組雨落溝が巡る。基壇削平。小規模、仮設的
 - ①飛鳥寺、法隆寺の中門基壇：15.3m×13.5m、18.2m×14.0m。
- 2) 回廊：基壇幅約6m。石組雨落溝を伴う。小規模。仮設的。
- 3) 回廊の東西の範囲：回廊心々間約158m。外側の雨落溝間の距離約164m。
- 5、講堂：未発見。
- 6、僧坊：金堂の北方に南北に並ぶ東西棟掘立柱建物2棟がある。
 - 1) 南側の大型掘立柱建物：東西11間×南北2間。巨大柱穴。柱抜き穴を伴う。
 - 2) 北側の大型掘立柱建物：東西6間以上×南北1間。巨大柱穴。主柱径50～60cm。
 - ①柱穴埋土：7世紀中頃の土器、柱抜き穴埋土から7世紀後半の土器が出土。
- 7、南門：中門の南30m。基壇土の一部と石組雨落溝を検出。整地層(天武朝頃)が覆う
- 8、寺域：東西180m以上、南北160m以上。

G、吉備池廃寺の特徴と意義

- 1、伽藍配置：法隆寺式配置(東に金堂、西に塔を並列)。最古の例。
 - 1) 金堂・塔間の距離：中心間で85m(高麗尺240尺)。法隆寺は31.5m。その2.7倍。
 - 2) 中門・回廊・僧坊発見の意義：一応の完成を窺わせる。一部は仮設的。
- 2、金堂基壇規模：東西36m、南北28m(南側張出部を除くと24.5m)。
 - 1) 間口と奥行との比……100：75(100：66)。
 - ①飛鳥時代諸寺の金堂：基壇の間口・奥行の比100：80。建物は間口5間×奥行4間
 - 2) 吉備池廃寺金堂：飛鳥諸寺に比べ桁違いに大きい。文武朝大官大寺に次ぐ規模。
 - ①金堂建物：平面は5間×4間。裳階付きか(薄手の小型瓦が出土)。
- 3、塔基壇：一辺30m、高さ2.1m。巨大。
 - 1) 法隆寺の基壇 方12.5m 初層一辺6.4m
 - 2) 東大寺の東塔(七重塔)基壇 方24m 初層一辺16.5m(55尺)
 - 3) 文武朝大官大寺基壇 方35m 初層一辺15.0m(50尺)
 - 2) 吉備池廃寺の塔：東大寺の東塔・西塔、文武朝大官大寺の九重塔と並ぶ巨塔。
- 4、吉備池廃寺の年代
 - 1) 創建期の単弁重弁蓮華文軒丸瓦：山田寺金堂軒丸瓦と類似。その直前の年代。
 - ①山田寺金堂の造営：643年(癸卯^{乙卯})、『上宮聖徳法王定説』裏書と発掘成果から
 - 2) 創建期の軒平瓦：若草伽藍使用のスタンプ杏葉忍冬文軒平瓦と同じ範型を使用。
 - ①若草伽藍：金堂は聖徳太子時代に完成。塔は山背大兄王の時に完成。
 - ②スタンプ杏葉忍冬文軒平瓦の下限：山背大兄王が自害する皇極2年(643)以前。
 - ③吉備池廃寺スタンプ瓦：範型にくずれがあり、若草伽藍の瓦生産より遅れる。
 - 3) 吉備池廃寺の軒丸瓦・軒平瓦の年代：643年造営開始の山田寺にわずかに先行。
 - 4) 軒瓦や丸・平瓦の大きさ：飛鳥諸寺の瓦より2割ほど大型。巨大な堂塔と関係。
- 5、移建を示す所見：
 - 1) 軒瓦：創建期の組合せに限られる。→補修瓦がない。
 - ①瓦の出土状況：吉備池廃寺が短期間で命脈を絶った寺院であることを示唆。
 - ②焼瓦や焼土：全くない。焼亡したのではない。
 - 2) 礎石・基壇化粧石：全くなし。建物を別の場所に移築した可能性を示唆。
 - 3) 木ノ本廃寺：吉備池廃寺と同範軒瓦や、共通する丸・平瓦が出土。
 - ①より新しい7世紀後半の瓦群が出土。
 - 4) 木ノ本廃寺の性格：吉備池廃寺の移建先の有力候補。寺跡の遺構は未検出。
- 6、吉備池廃寺の寺名：百濟大寺。
 - 1) 壮大な寺院、創建年代：舒明天皇11年(639)、舒明天皇が百濟川のほとりに百濟大宮と並んで建てた百濟大寺として相応しい。
 - 2) 天武2年(673)：百濟大寺を高市の地に移して高市大寺となる(『縁起』)。
 - ①同年：「造高市大寺司」を任命(『書紀』)。
 - ②高市大寺への移建：吉備池廃寺の発掘所見と符号。高市大寺＝木ノ本廃寺が有力
 - 3) 吉備池北方の春日社付近の地名：「カウベ」・「コヲベ」・「高部」。

- ①『大安寺伽藍縁起』：百済川辺に九重塔を造立するにあたり、子部社を切り開いて造営したため社神の怨みにより、九重塔と金堂の石鷲尾を焼失したと記載。
- ②『日本三代実録』元慶4年(880)10月20日条：百済大寺は子部大神の近傍にある。→「百済大寺」と「子部社」「子部大神」との関係を示唆。
- 4) 「百済」の地名：吉備池廃寺の周辺には「百済」の地名は残らない。
 - ①壬申の乱：大伴吹負「百済家」。大伴氏の本拠地は香久山北方の竹田のあたり。
 - ②古代の「百済」：香久山西北方・北方の一帯であった可能性が高い。
 - ③「米川」の上流部：「百済川」と呼ばれたか。
- 5) 百済大寺：「最初の天皇勅願の寺」として寺院史上、極めて重要な位置を占める。
 - ①九重塔建設：後の大官大寺に継承される国家筆頭官寺を象徴。
 - ②吉備池廃寺の塔：九重塔として相応しい巨塔。百済大寺跡であることの証拠。
- 6) 九重塔等焼亡：『縁起』にのみ見え、『書紀』には記載なし。単なる伝承か。
- 7) 百済大寺：舒明天皇によって舒明11年(639)に計画・造営が進められ、皇極天皇によって完成されたい。

7、百済大寺の発見と古代史研究上の意義

- 1) 法隆寺式伽藍配置：最古の寺院。7世紀中頃以前に起源したことを明確にする。
- 2) 所用瓦・伽藍配置：斑鳩寺・四天王寺・法隆寺と密接に関係。何故か。
 - ①『大安寺伽藍縁起』：百済大寺は聖徳太子の遺言に従って建立したと伝える。
 - ②吉備池廃寺出土の軒平瓦：斑鳩寺・四天王寺と同範瓦を使用。
 - ③斑鳩寺の造営工人組織：吉備池廃寺の造営への関与を窺わせる。
- 3) 吉備池廃寺の場所：聖徳太子が青年期まですごした「上宮」に近い場所。
- 4) 造寺司・阿倍倉梯麻呂の本拠地の阿倍：吉備池廃寺の東方約1km。
 - ①安倍寺：7世紀中頃造営。法隆寺式伽藍を採用。軒瓦も吉備池廃寺と密接に関係

8、6・7世紀の中国、朝鮮半島諸国：巨大な九重塔の建立が盛行。

- 1) 北魏の首都洛陽の永寧寺：熙平元年(516)、孝明帝が母・胡太后の要請で造営。
 - ①性格：国寺。皇帝建立の寺。最高統治者による仏教政策の中で最高位の寺格。
 - ②木造九重塔：伽藍の中心に位置(門・塔・仏殿が南北一直線に並ぶ)。
 - ③534年焼失：心柱は1年後も燻る(「洛陽伽藍記」)。火災の凄まじさを物語る。
 - ④九重塔の規模：基壇一辺38.2m。推定高約147m。
- 2) 百済弥勒寺：扶余南東の益山郡。武王(600~641)が発願。木造九重塔を建立。
 - ①伽藍配置：門・塔・金堂を南北一直線に並べた伽藍を東西に3ヵ所並列。
 - ②中央の伽藍：中心的。塔基壇は一辺長18.5mの二重基壇。
- 3) 新羅皇龍寺の木造九重塔：善徳王が同14年(645)に建立。国家寺院。
 - ①塔の性格：隣国からの災いを鎮めることを願って建立。護国仏教思想に基づく。
 - ②寺院の性格：護国仏教の中心寺院。九重塔は護国寺院の象徴。
 - ③寺の規模：壮大。回廊の東西長約165mは、百済大寺とほぼ同規模。
 - ④伽藍配置：一塔三金堂。中金堂とその東西に小金堂、中金堂の南に九重塔。
 - ⑤塔の規模：基壇一辺32m。初層方7間(柱間10.5尺等間、総長22m)。高約80m。
- 4) 東アジアの国寺：国王が鎮護国家仏教の象徴として、木造九重塔の建立が盛行。
- 5) 天皇発願の百済大寺・大官大寺での九重木造塔の建造：その思想を導入。

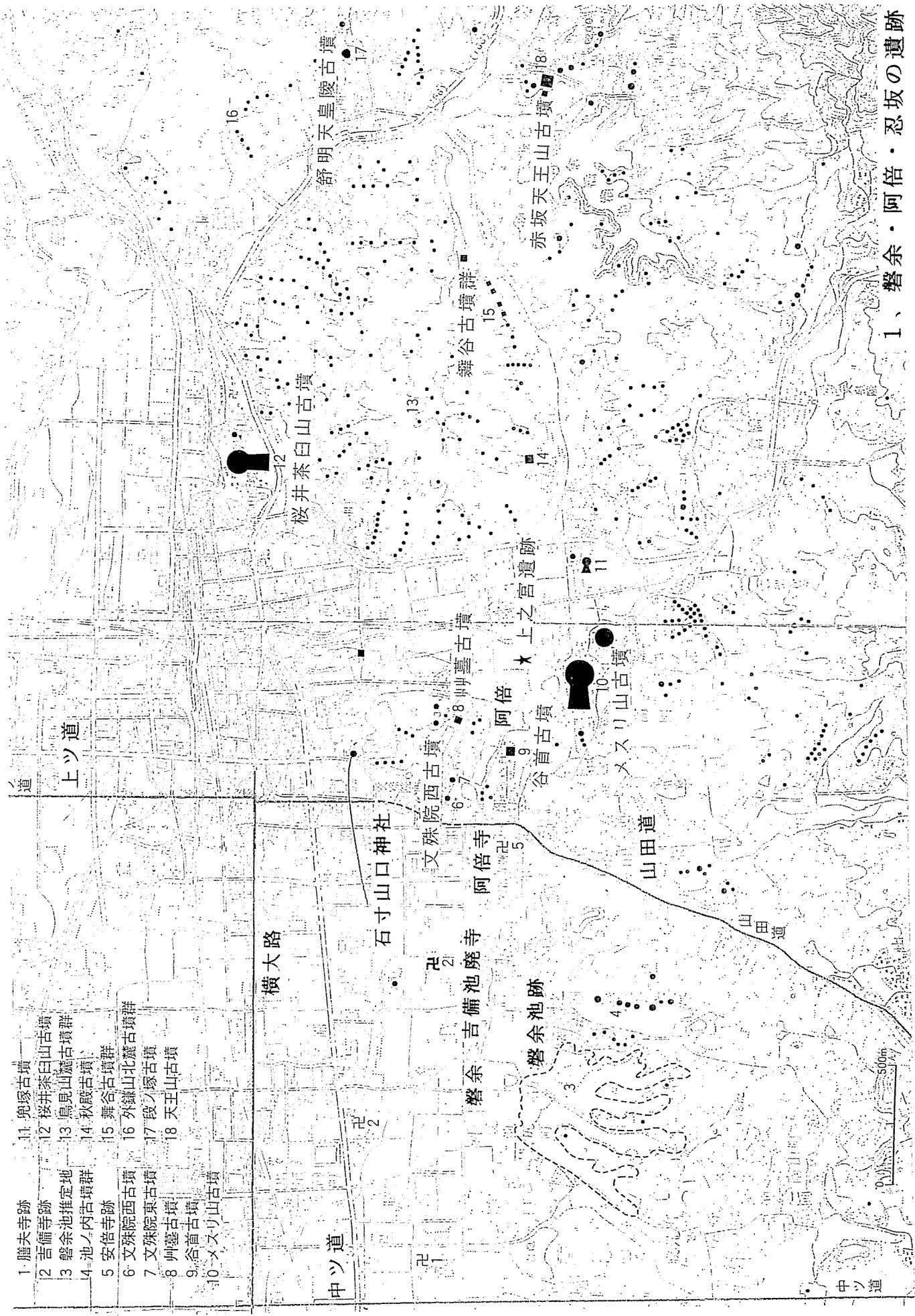
9、舒明天皇時代の再評価：新しい時代の始まり。

- 1) 初めて飛鳥盆地南部の「飛鳥」に飛鳥岡本宮を建設：飛鳥に宮殿が定着する契機。
- 2) 百済大宮を造営：「丁」を徵発して造営。1年3ヵ月の造営期間。画期的な宮殿か。
- 3) 国家仏教の出発点：百済大寺(吉備池廃寺)で大伽藍と九重塔を造営。
- 4) 東アジア諸国との外交・交流：
 - ①第1回遣唐使の派遣、聖徳太子が派遣した遣隋留学僧南淵請安(せいあん)、留学生高向漢人玄理らが長期の留学生生活を終えて帰国。
 - ②百済・高句麗・新羅：使者を派遣して朝貢。

- 5) 官人の宮殿への出退刻限規制の試み：官人制の整備。
- 6) 服属地の拡大：屋久島へ使者派遣・帰化。蝦夷征討軍を派遣、蝦夷が朝貢。
- 7) 八角形墳の創出：「天皇」絶対化への画期。
- 8) 天智天皇・天武天皇の父：

H、上宮門(うへのみかど)・谷宮門(はざまのみかど)と「今来の双墓」

- 1、皇極3年11月条：蘇我大臣蝦夷・入鹿臣が家を甘樫岡にならべて建てる。大臣の家を上宮門と曰う。入鹿の家を谷宮門と曰う。男女を王子と曰う。
- 2、甘樫丘東麓遺跡：2005年から継続発掘調査。「入鹿の宮門」跡と大きく報道。
 - 1) 遺跡の立地：丘陵の南麓から北西に入り込む谷間。約7000㎡の狭い平坦地。
 - 2) 大規模な造成：谷の深い部分を埋める厚い整地層。大きく3時期の盛土整地。
 - 3) 掘立柱建物群：広範囲で複数時期の多数の建物を検出。
 - ①柱穴：一辺1、2mに及ぶものがあるが、概して大きくはない。
 - ②柱穴の埋土：焼土・炭を含むものがある。
 - ③建物方位：まちまち。規格的な造営とは言えない。
 - 4) 金属製品製作の炉・焼土面：藤原宮期。
 - 5) 丘陵裾部の小尾根上：谷の北東側。谷より10mほど高い地点。
 - ①丘陵をめぐる掘立柱塼。区画塼。大壁造り建物(渡来系建築)。
 - ②丘陵裾部の石敷：幅2、5m、長さ11、5m。
- 3、甘樫丘東麓遺跡の遺構群の時期区分：大きく3時期に区分。
 - 1) I期：7世紀前半。谷筋の中央に南北方向の石垣。東側の造成平坦地の土留め。
 - ①石垣東側：総柱建物(高床倉庫)など建物を建てる。
 - ②石敷：幅1、5～3m。山側に縁石、谷側に石組溝。
 - 2) II期：7世紀中頃～後半。石垣を覆い全面を盛土整地。中小規模の建物を建設。
 - ①石組溝：長さ12m以上。
 - 3) III期：藤原宮期。II期の整地土上に再び盛土整地。鍛冶炉・焼土面、建物。
 - 4) 遺物：
 - ①多量の土器：7世紀前半～末。円面硯。
 - ②軒丸瓦(豊浦寺同範)・垂木先瓦(古宮遺跡同範)：蝦夷建立の豊浦寺と関係か。
 - ③鉄器生産工房に関わる遺物：鉄釘・鉄斧。るつば、フイゴ羽口。砥石。
 - 5) I期の遺跡の性格：蘇我蝦夷・入鹿の邸宅との関係で注目されている。
 - 6) 「宮門」と表現されるにふさわしい大規模建物：未発見。課題が多い。
- 4、蝦夷・入鹿の墓—「今来の双墓」—：
 - 1) 『大和志』(享保17年=1734)記載の双墓：「葛上郡今木双墓、古瀬水泥村に在り」
 - 2) 水泥古墳と隣接する水泥塚穴古墳：蝦夷・入鹿の今来双墓と伝承。
 - 3) 水泥古墳：御所市大字古瀬小字ウエ山。入鹿墓説。
 - ①古墳・石室：径14m、高さ5mの円墳。長さ10、7mの横穴式石室。
 - ②家形石棺：玄室に1基、羨道に1基。古く盗掘。遺物なし。
 - ③羨道の家形石棺：蓋の短辺側の縄掛突起面に浮彫り蓮華文(径30cmの6弁蓮華文)
 - 4) 小山田古墳：蘇我蝦夷の「大陵」説。
 - 5) 菖蒲池古墳：入鹿の「小陵」説。小山田古墳の西140mに位置。
 - ①立地：甘樫丘の南斜面。東西に谷、背面に丘陵尾根。風水思想に基づく造墓。
 - ②墳丘：一辺30mの二段築方墳。地山を整形した上に版築盛土。周溝。外堤。
 - ③墳裾と段築裾：花崗岩切石列を設け、周溝底面にバラスを敷く。
 - ④埋葬施設：切石積み横穴式石室(岩屋山式)、漆喰塗り。精巧な加工を加えた家形石棺2基(身の内面黒漆塗り、蓋内面朱漆塗り)を安置。
 - ⑤削平・埋立て：天武朝頃に周溝を埋め、掘立柱建物を建て、石組溝を設ける。
- 5、小山田古墳の破壊：天皇陵の場合、改葬後の初葬墓はどのように扱われたのか。
 - 1) 蘇我馬子・蝦夷・入鹿墓：罪を受けて破壊されることになったのか。



- 1 膳夫寺跡
- 2 吉備寺跡
- 3 磐余池推定地
- 4 池ノ内古墳群
- 5 安造寺跡
- 6 文殊院西古墳
- 7 文殊院東古墳
- 8 舟登古墳
- 9 谷首古墳
- 10 メスリ山古墳
- 11 兜塚古墳
- 12 桜井茶白山古墳
- 13 鳥取山麓古墳群
- 14 秋鹿古墳
- 15 舞谷古墳群
- 16 外鎌山北麓古墳群
- 17 段ノ塚古墳
- 18 天王山古墳

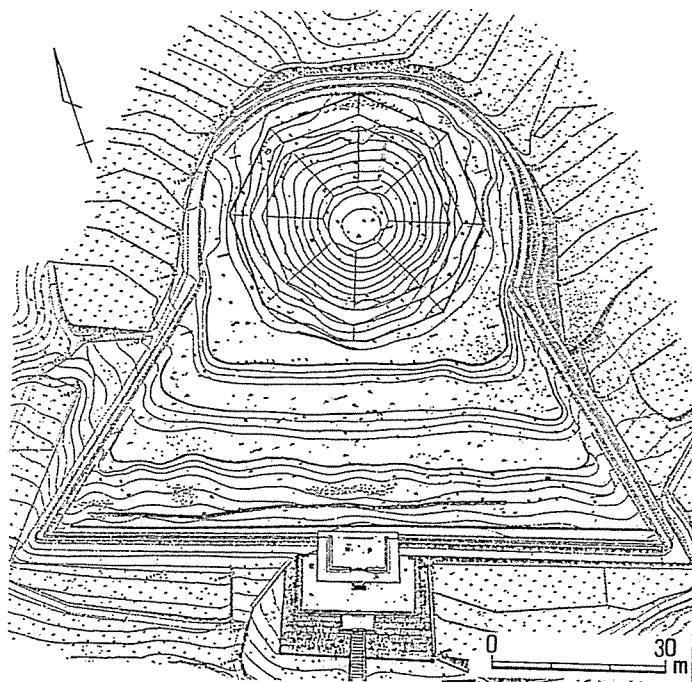
1、磐余・阿倍・忍坂の遺跡



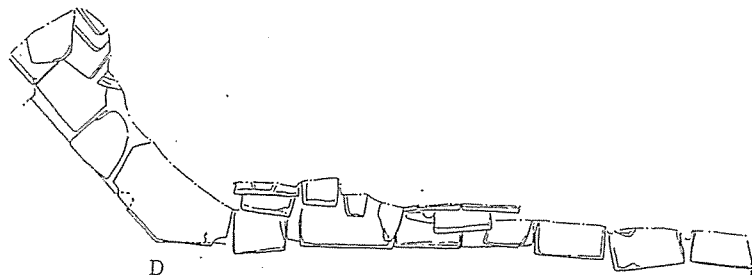
第3図 押坂内陵上円部下段裾西南隅角部の状況

4、段ノ塚古墳(舒明陵)

上円部裾部西南角の状況



1、段ノ塚古墳(舒明陵)図



D

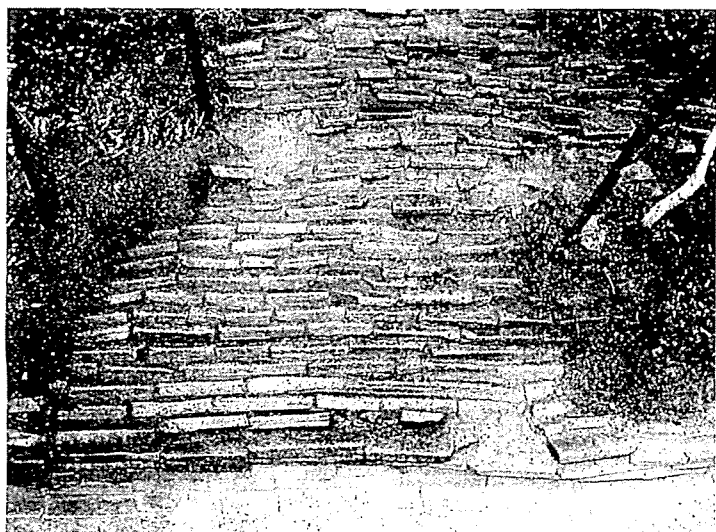
4 DE辺(1)

5、段ノ塚古墳の南東角・東辺の板石積み



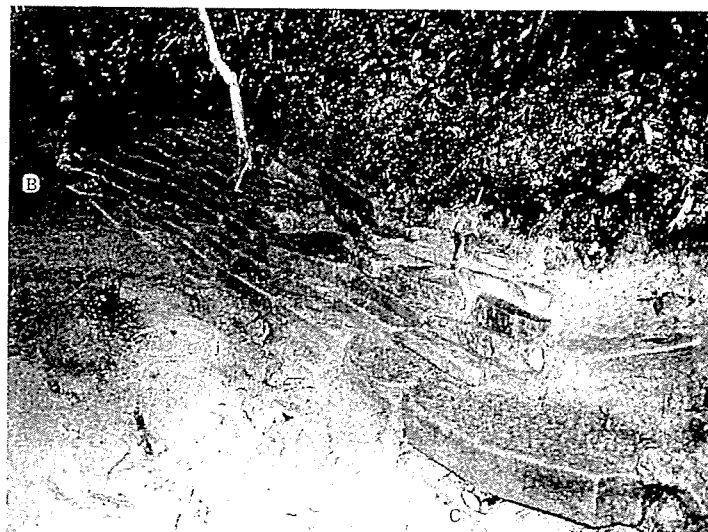
2 押坂内陵 上円部裾 AB辺

2、段ノ塚古墳裾部の板石積み



1 押坂内陵 上円部裾 AB辺 N地点

6、段ノ塚古墳裾部の板石積み

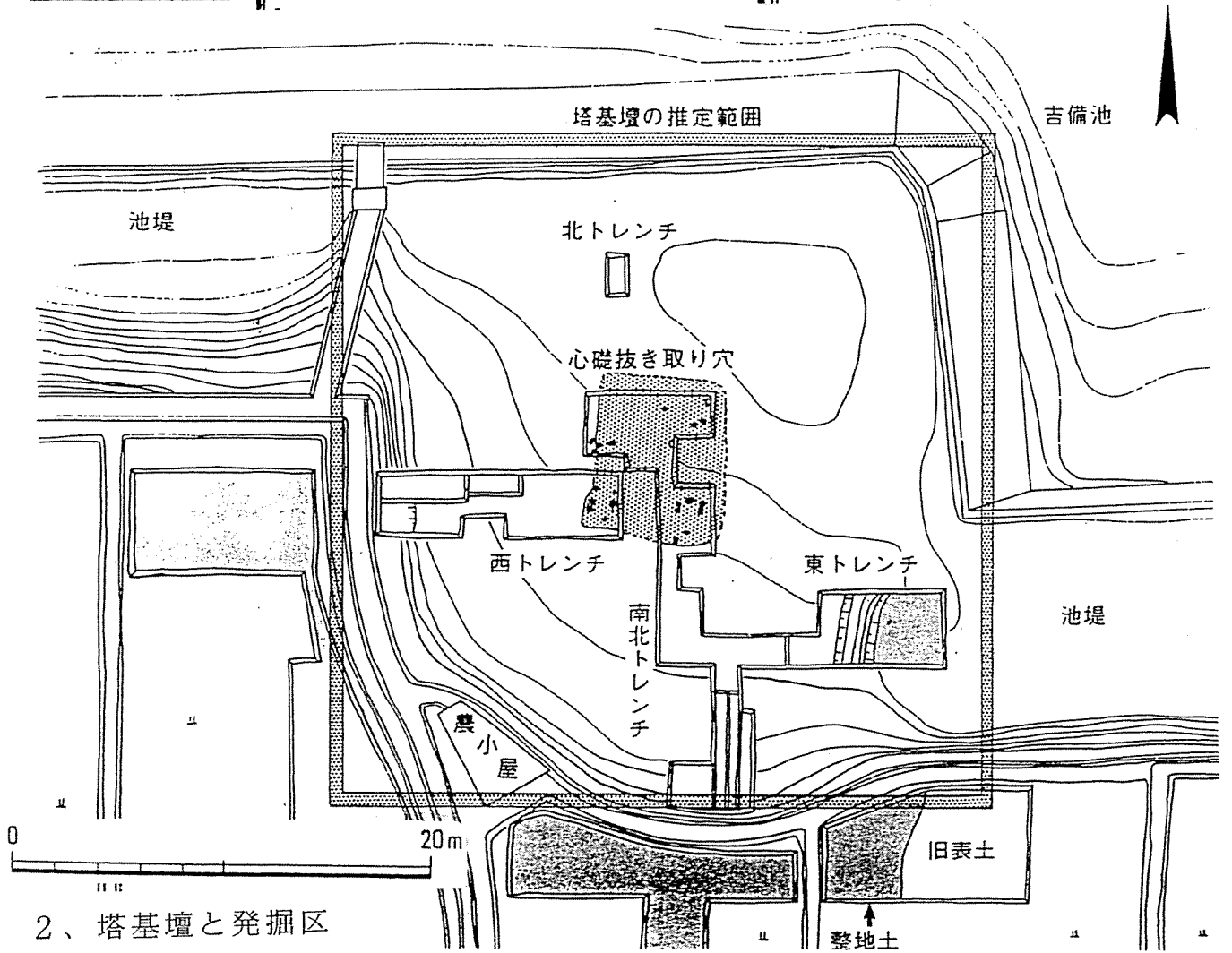
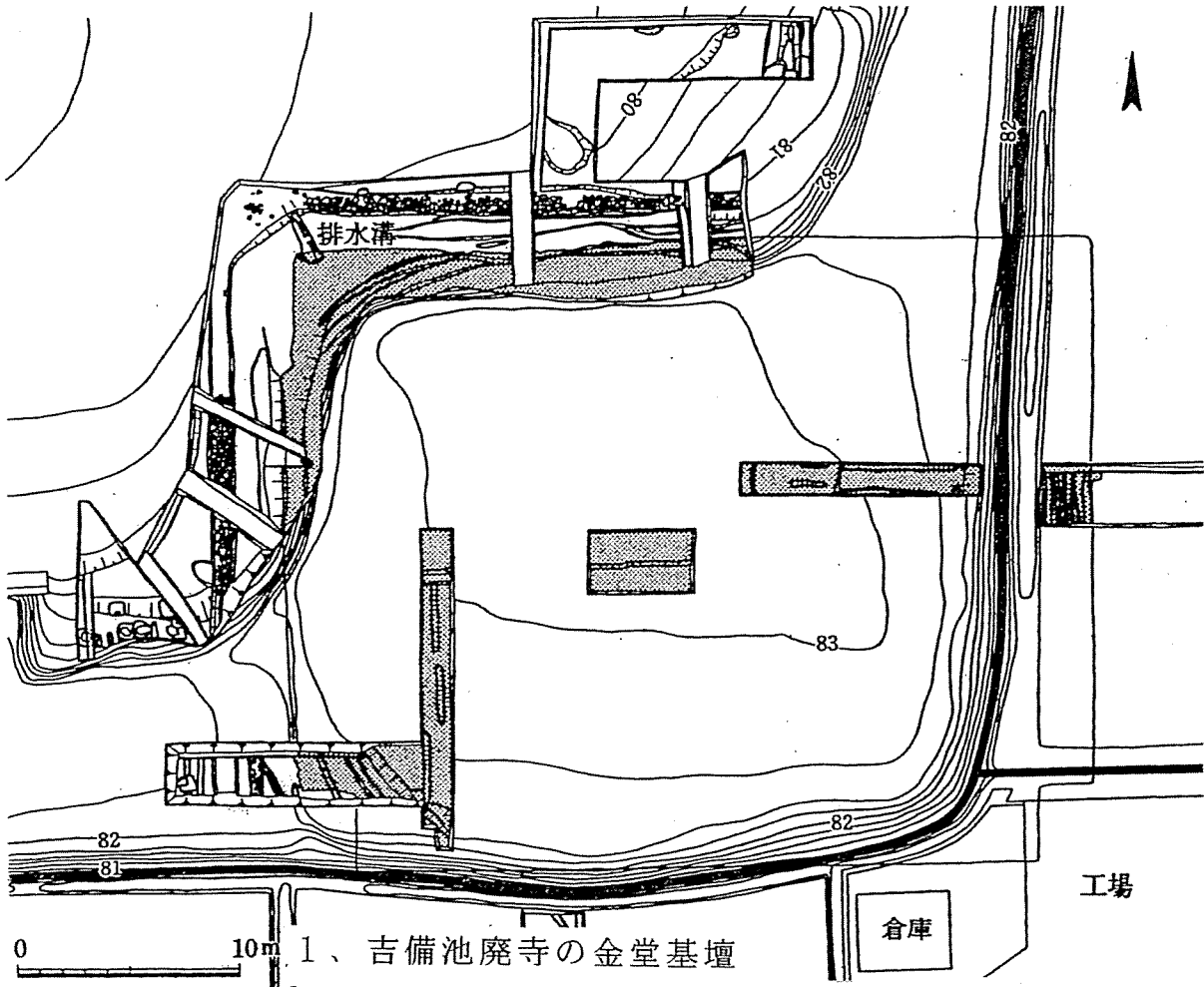


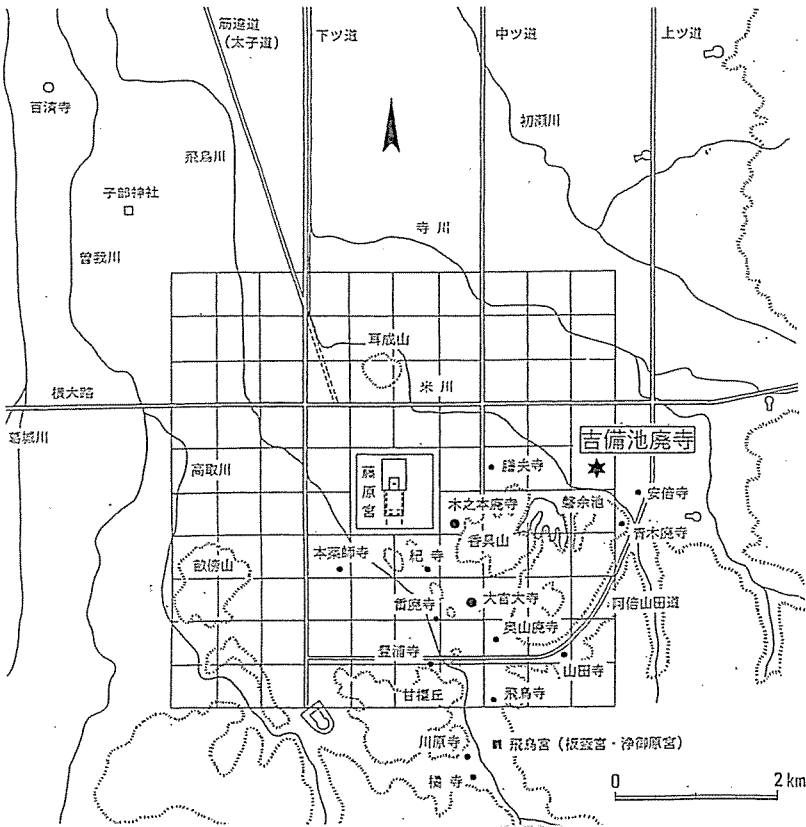
2 押坂内陵 上円部裾 BC辺

3、段ノ塚古墳裾部板石積み

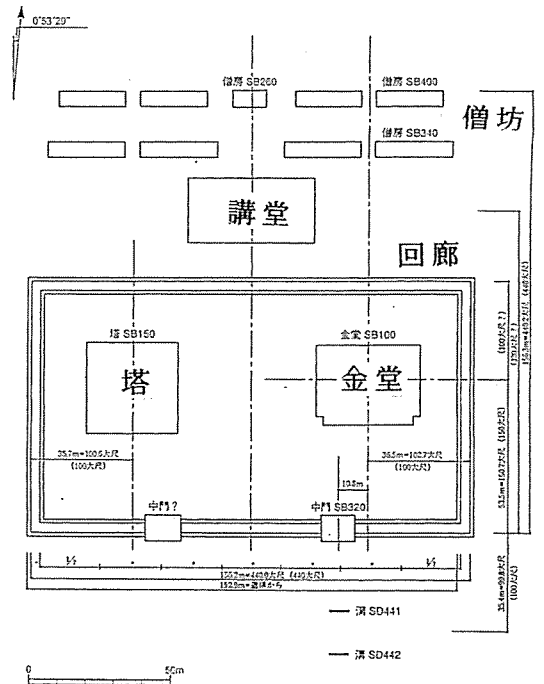
1 百濟大寺・高市大寺・大官大寺関係略年表

- 617 (推古25) 聖徳太子、熊凝村に精舎を建てる(扶桑略記)
- 621 (推古29) 太子病み、熊凝精舎を朝廷に献ずる(扶桑略記)
- 639 (舒明11) 7 百濟川のほとりに大宮と大寺を造作する。西の民は宮を造り、東の民は寺を作る。書直県を大匠とする(書紀)
略記では1月、大安寺碑文・大安寺資財帳では2月のこととし、ともに熊凝精舎を移して百濟大寺を建つとある。
- 639 (舒明11) 12 百濟川のほとりに九重塔を建てる(書紀)
- 639 (舒明11) 寺塔焼亡する(元亨釈書)
- 642 (皇極元) 9. 3 詔して近江と越の丁を徴発し、百濟大寺の再建を企てる(書紀)
- 皇極天皇代 造寺司に阿倍倉橋麻呂、穂積百足を任ず(資財帳)
- 645 (大化元) 8 孝徳天皇、寺に使を遣して、僧尼に仏教の修業につとめること諸寺造営の助成を諭す。寺主として、僧恵妙を任ず(書紀)
- 668 (天智 7) 天皇、百濟寺に丈六釈迦像・脇土等を造り、安置す(元亨釈書・帝王編年記)
- 673 (天武 2) 12.17 小紫美濃王、小錦下紀臣訶多麻呂を造高市大寺司に任命する(書紀・資財帳)
- 673 (天武 2) 百濟大寺を高市郡に移す(資財帳・東大寺要録・三代実録)
- 677 (天武 6) 9. 1 高市大寺を改めて大官大寺と号す(資財帳)
- 682 (天武11) 8 140余人が大官大寺にて出家する。寺僧に糶・綿を施す(書紀)
- 684 (天武13) 天皇病す。草壁皇子、勅を奉じて百僚を率いて大官大寺に詣ず(資財帳・元亨釈書)
- 685 (天武14) 9 天皇不豫のため、大官大寺・川原寺・飛鳥寺で誦経(書紀)
- 686 (朱鳥元) 5 食封700戸、墾田900余町が施入される(書紀)
- 686 (朱鳥元) 7 諸王臣等、天皇のために観音像を造り、大官大寺において観音経を説く(書紀)
- 686 (朱鳥元) 12 先帝(天武天皇)のために無遮大会を大官・飛鳥・川原・小墾田豊浦・坂田の五寺にて行ふ(書紀)
- 692 (持統 6) 大官大寺に資財・奴婢を施入。鐘を改鑄する(略記)
寺主恵勢法師をして鐘を鑄さしむ(資財帳)
- 698 (文武 2) 大官大寺に塔を建つ(元亨釈書)
- 文武天皇代 九重塔と金堂を建て、丈六仏を造る(資財帳)
- 701 (大宝元) 6 下道首名をして僧尼令を大安寺にて説かしむ(続紀)
- 701 (大宝元) 7.27 造大安 薬師二寺の官は寮に准じ、造塔 丈六の二官は司に准ず(続紀)





1、飛鳥・藤原京と百済大寺の位置関係



6、百済大寺の伽藍復原



2、磐余から阿倍・忍坂を望む



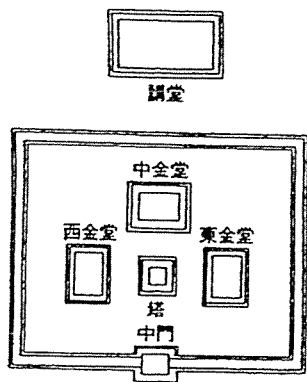
5、金堂基壇北辺と暗渠排水



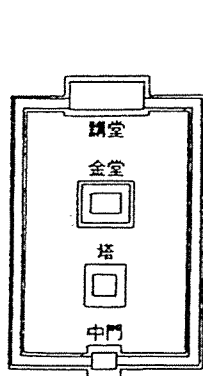
3、百済大寺ば金堂と塔の土壇



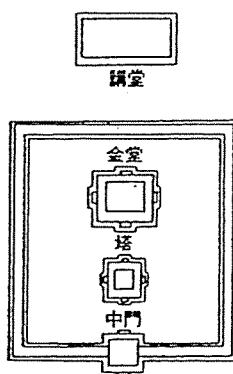
4、百済大寺の金堂跡



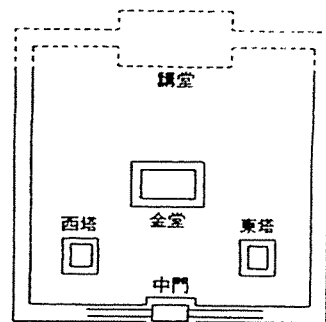
① 飛鳥寺



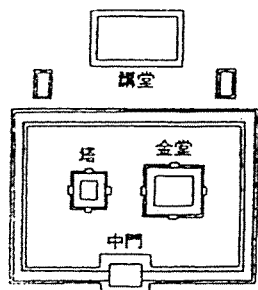
② 四天王寺



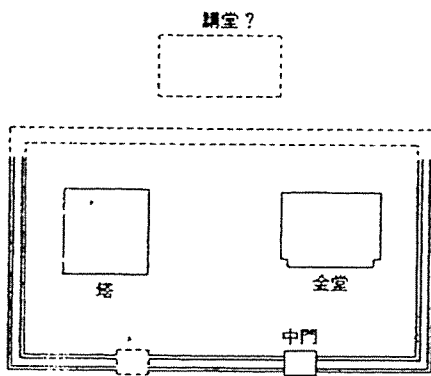
③ 山田寺



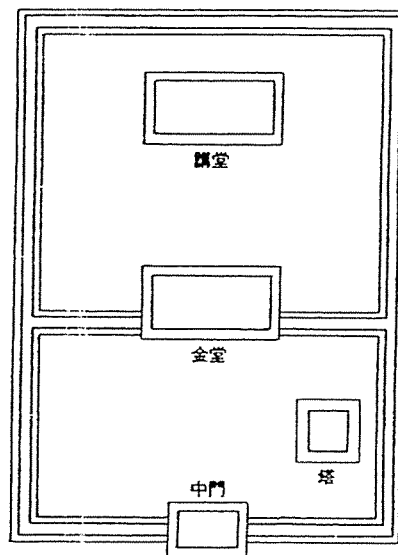
④ 薬師寺



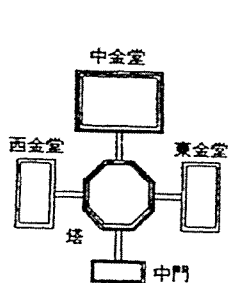
⑤ 法隆寺



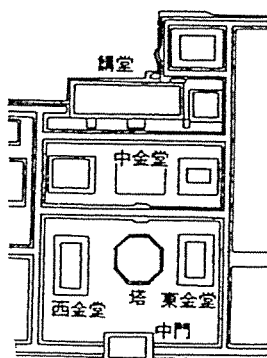
⑥ 百濟大寺



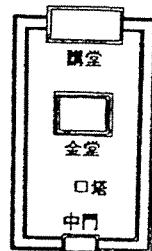
⑦ 文武朝大官大寺



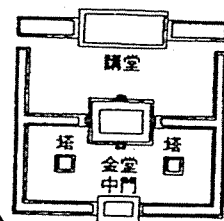
⑧ 高句麗 清岩里廃寺



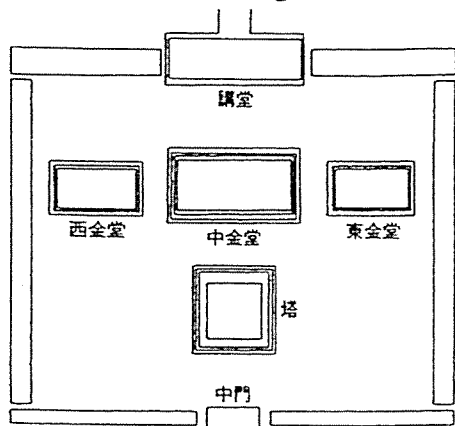
⑨ 高句麗 定陵寺



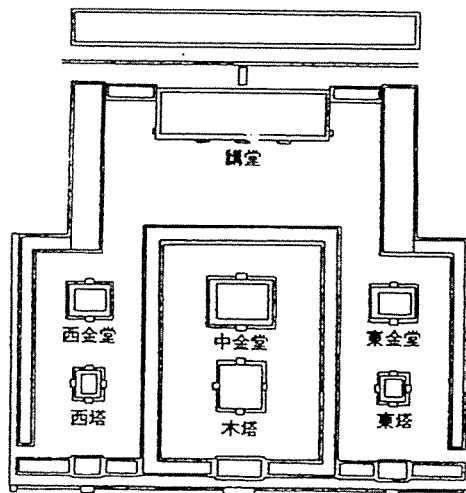
⑩ 百濟 定林寺



⑬ 新羅 感恩寺

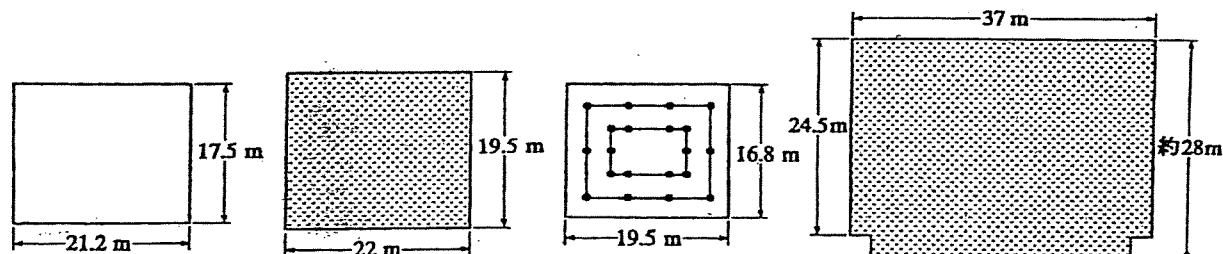


⑪ 新羅 皇龍寺



⑫ 百濟 弥勒寺

1、日本・朝鮮半島諸国の古代寺院の伽藍配置

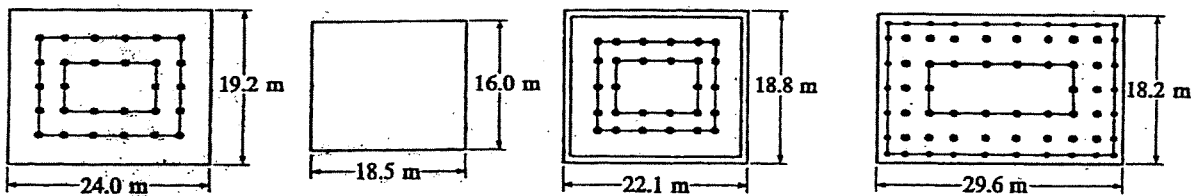


飛鳥寺中金堂 596年頃 (明日香村飛鳥)

若草伽藍金堂 620年頃 (斑鳩町法隆寺)

山田寺金堂 648年頃 (桜井市山田)

吉備池廃寺金堂 (桜井市吉備)



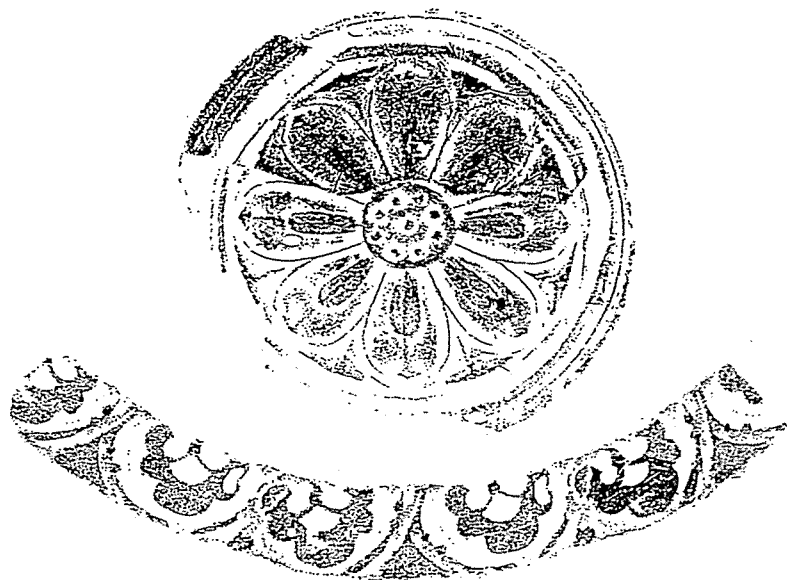
川原寺中金堂 670年頃 (明日香村川原)

紀寺金堂 675年頃 (明日香村小山)

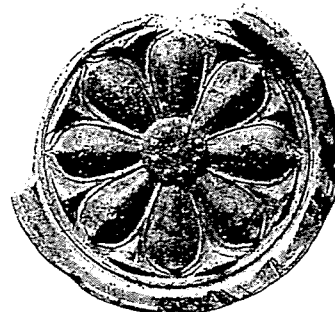
法隆寺金堂 680年頃 (斑鳩町法隆寺)

本業師寺金堂 688年頃 (橿原市城殿町)

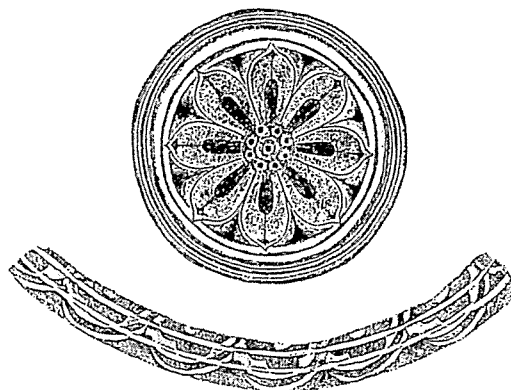
1、飛鳥時代諸寺の金堂規模



2、吉備池廃寺の軒瓦

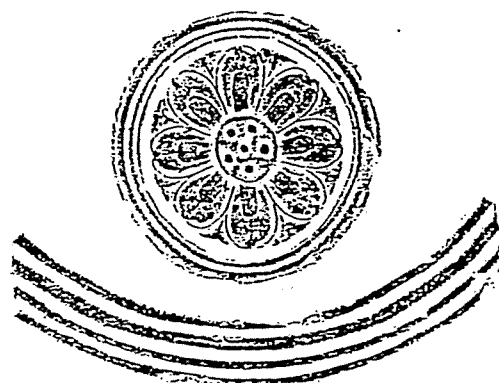


3、百濟大寺の軒丸瓦

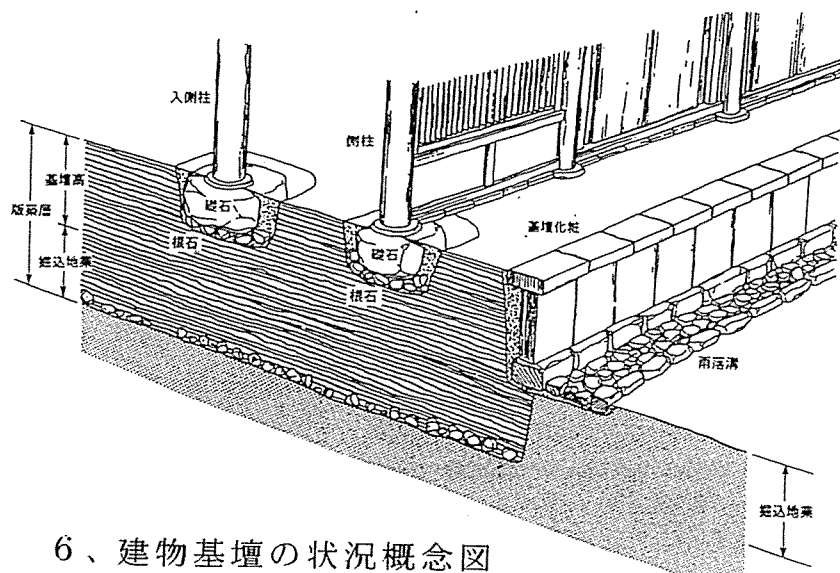


軒丸瓦18-軒平瓦18

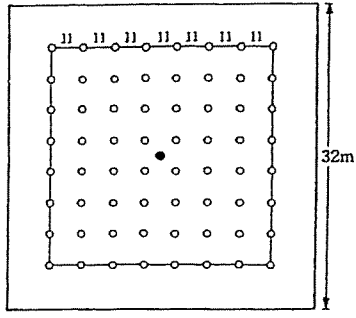
4、百濟大寺の軒丸瓦・軒平瓦



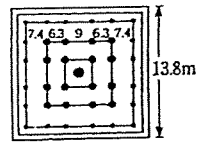
5、山田寺の軒瓦



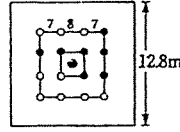
6、建物基壇の状況概念図



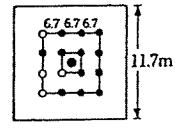
(a) 百濟大寺塔



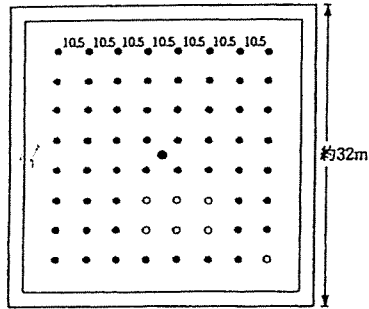
(d) 法隆寺塔



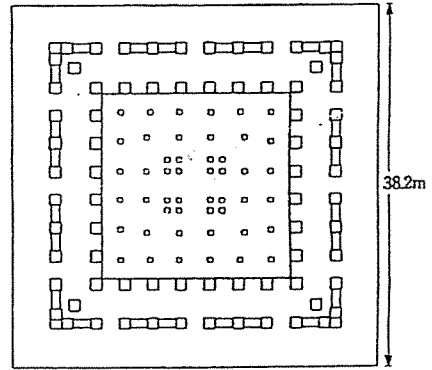
(e) 山田寺塔



(f) 川原寺塔

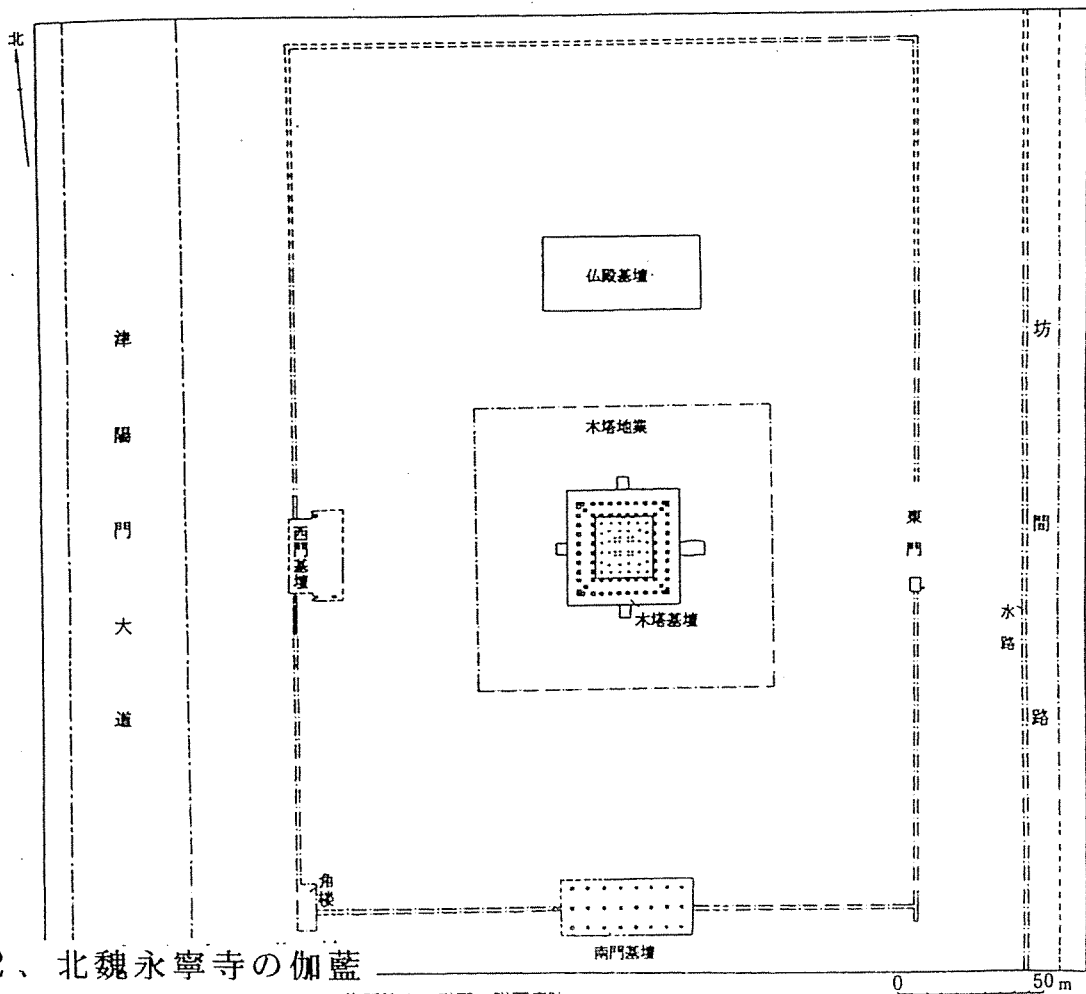


(b) 新羅 皇龍寺塔



(c) 北魏 永寧寺塔

1、古代諸寺の塔の規模比較



2、北魏永寧寺の伽藍

■ 発掘柱穴・礎石・礎石痕跡 □ 復原柱穴・礎石・礎石痕跡

【メモ】